
魔法少女リリカルなのはstrikers ～魔王～

へえあっ!?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 　（魔王）

【Nコード】

N47570

【作者名】

へえあっ!?

【あらすじ】

人は音を奏でる。

それは嘆きの音、感激の音、美しい音ばかりだ。

しかしその音は気づいてはもらえない。

ある人物によってその音はさらわれてしまったから。

さらわれた音の持ち主は『坊や』

さらった人物は『魔王』

やがて『坊や』は決心する。『魔王』から『音』を取り返すと。

自分から『音』を奪った『魔王』に仕返しをすると。

一 奏目（前書き）

とあるPCゲームをやっているこの小説も書いてみようと思いました。

更新速度はあまり早くはありませんので…すみません

一 奏目

「きゃあああああっ!!」

栗色の髪をした白い魔導師は凄まじい音と共に地面に叩きつけられる。

「う…あ……」

白い魔導師はなんとか立ち上がろうとするが、体が思うように動かない。

彼女の白いバリアジャケットは半分が赤く染まっていたからだ。それだけで大量の出血をしていることがわかる。

「……………ふむ」

そこへ上からゆっくり降りてくる謎の人物

顔はフードと仮面によって確認できず、全体的に黒く、時折赤が混じっている短いコートを着ている。

そしてその手にはリボルバーがついた剣、ガンブレードが握られて

おり、バリアジャケットと禍々しくマッチしていた。

「……その体でよくここまでやって来たものですね。
ロクに休みも取ってないように見えますが？」

リボルバーを取り外し、銃弾型のカートリッジを装着しながらその人物は言う。

声からして男性のようだった。

「あなたは……どう……してこんなことを……っ!？」

自分の真上に浮いている男に白い魔導師は聞いた。

しかし男はいまだにカートリッジを装着中で、白い魔導師を見もしなかった。

「く……………」

自分の体に落ちてくる葉莢を見ながら、白い魔導師は今にも失いそうな意識を保とうとした。

しかし身体中の怪我によって次第に目の前が霞んでき、段々意識が途切れていった。

「じゃあ……あなたの……お名前は……？」

意識が無くなる寸前、なぜか白い魔導師はそんなことを聞いた。

「……………」

男は装着中だった手を止め、仮面の奥の瞳で彼女を見た。

「…………名前ですか？…いいでしょう、私は……『魔王』と申します。」

「ま…………お…………う…………」

「以後、お見知りおきを…それでは、さようなら…」

最後に彼女が見たのは自分に銃口を向ける『魔王』の姿だった。

二奏目（前書き）

魔王

読者様も聞いたことがあるでしょう

『魔王』という名の曲を

二 奏目

「……………」

白い魔導師は目を閉じたまま、もう動かなかった。

男は向けていた銃口を下げ、ゆっくりと地に降りて白い魔導師に近づく。

「氣絶したか…しかしこの怪我となると、もって10分だな…さて、どうするか…」

今にも消えそうな灯火を見ながら『魔王』は考える。

「……そうだな…普通の雑魚魔導師ならこのまま殺す所だが…この少女は確か未来のエースだったな……ふふふ」

不気味に笑いながら『魔王』はコートの中から水色の液体が入ったビンを取り出す。

そして蓋を抜き、中の液体を瀕死の少女にかける。

「お前は私を追いかけてくれるのかな？
…もしそうなら、いつか私と遊んでくれることを楽しみにしているぞ…」

中の液体が全て無くなるのを確認し、『魔王』は背を向けて歩みだした。

やがて姿が見えなくなり、その場には気絶したままの『高町なのは』しかいなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「さっびいっ！！」

1人の少年が極寒の地を歩いていた。
生地の高いロングコートの中に手を突っ込みながら目的地まで歩いていく。

少し赤い色で、右サイドは短く、左サイドは長い髪をしたアシメントリー。

片方の目は赤、もう片方は黒のオッドアイ、
青色の丸い宝石がついたピアスを左の耳だけにつけており、彼は全体に頭がなんともアンバランスである。

「まったく、なんで俺が回収任務なんかにつかなきゃいけないんだよ……」

俺は端末を開く。

『本日 午後05時00分

ガジェットと思われる残骸が第〇〇管理内世界にて発見したとの現地の住民より通報あり。

曖昧な情報のため管理局は動かず。

速やかに確認にあたれ』

いきなり届いたメールを見ながら男は周りを見返す。

「ま、たまたま近くにいたのは運がよかったかもな。

……確か指定があったのはこのあたりだったなあ……と、あれか？」

白い雪の景色に似合わない、何かの黒い破片が遠くにうつすらと見えた。

「やれやれ、さっさと終わらせますか。」

どうせ確認だけだしなと男は言って破片がある方向に向かっていった。

「うわゝ、こりゃすごいや」

辺りをうめつくす機械の残骸、手紙と一緒にいていたガジェット
の資料を見ながら男は残骸の中を歩く。

「この残骸は？型か？いや、でも最新の可能性も……は？」

男は間拔けな声を出した。

うめつくす残骸の中に

「おい……こりゃ何の冗談だ！？」

血だらけの少女が倒れていたからだ。

「っ！！本部、今すぐ医療班を座標送るからそこによこせ！！理由
？知るか！！」

男はすぐさま管理局に通信、医療班をよこすように頼んだ。

そして通信を終えると少女の首に手をやる

「……よし、まだ生きてるな」

僅かだが脈があったことを確認し、頭を動かさぬよう、着ていたコートで少女を覆う。

「本部の速さなら1分くらいで来るだろう…：それまで死ぬんじゃないかねぞ？」

怪我の確認などをしながら、彼は医療班の到着を待った。

少女がこれ以上冷たくならないよう、しっかりと手を握ったままで。

三奏目（前書き）

この作品はちょっとガチで書いていききたいと思います

なので1話1話は短いです

三奏目

「なのはッ！！おいッしっかりしろよッ！！」

タンカに運ばれるなのはにヴィータは必死に声を掛けるが反応はない。

「ヴィータ三等空尉ッ！！落ち着いてください！！」

医療班のが必死にヴィータを離し、そのままなのはは緊急病院に連れていかれた。

ほかの作業員が現場確認をしている中、ヴィータは地面を殴る。

「くそお……ッ！！！！……なにが『一人で大丈夫』だよッ……全然大丈夫じゃねえじゃんかッ！！」

ヴィータとなのははパトロールの最中、その世界の住民からガジェットと思わしき目撃情報入手した。

すぐさま現場に行こうとしたヴィータだったが、なのはがそれを抑

制、

ヴィータに住民の避難を頼んだのだ。

渋々ヴィータはそれを承諾し、なのはは一人現場に向かった

ヴィータは最初そこまで心配していなかった。

なのはの腕ならガジェットなんぞに遅れを取るとは思っていなかったからだ。

「アタシが悪いんだ……あそこに一人で行かしたアタシが……
ッ！！！！」

下唇を血が出るまで噛み、ヴィータは泣いた。

「くっそお……ッ！！！！！！」

「あのー？ ちょっといいっすか？」

「ッ！！？？……」

突如目の前の男から声がかかり、ヴィータは目を擦る。自分が泣く姿なぞ見せたくないのだ。

男はしまったという顔をして頭を掻く。

「……えーっと、タイミング悪かったすか？」

「……いや、問題ねえ……んで、一体なんの用だ？」

自分もすぐさま病院に向かいたかったので、ぶっきらぼうに答える
ヴィータ。

そんなヴィータに男は軽く敬礼し、

「自分、『雨宮 伸二』と申します。階級は三等陸士、管理局の
……ま、整備士みたいなもんです。
んでもってこの事件の第一発見者です」

「発見者？」

「ええ、聞く限り被害者の知り合いかと思いましたが一応報告に
と」

「………そうかよ」

本来ならばヴィータはお礼を言いたかった。彼が応急処置を施した
お陰で医療班が間に合ったのだから。

しかし今はなのはの様態が気になっているためか素直に礼を言うことができなかった。

「見つけた時に確認したんすけど、なんとか一命は取り留めますね」

「……本当か！？よかったあ………ッ！！！」

「ええ、出血がひどかったんすけどなんとか止血できましたし……
……しかし……」

雨宮は突然言葉に詰まり、渋い顔をする
そんな雨宮を気にせず、ヴィータは安心していた。

「……………」

「……っと、すまねえ、取り乱しちまった。……どうした？」

ヴィータは渋い顔をする雨宮の顔を見た。何か言いにくそうな、そんな顔をしている。

「……いえ、なんでもありません……報告は以上です、それでは失礼します」

「あ、おい！」

ヴィータが止める前に、雨宮は作業員の中に入っていた。

「…………お礼…………言っ
てなかったな」

ヴィータは誰にも言っているわけでもなく、ただ呟いた

……………

「……………」

『魔王』は暗闇の空間に、壁にもたれ掛かった状態で立っている。

なのはと対峙した時の格好のままで、彼は来客を待っているのだ。

「……………」

しばらくすると暗闇の向こうから足音が近づいてきた。

「……………遅かったですね」

冷たい、クールな声が空間に響く。

その声と同時に近づいてきていた足音が聞こえなくなる

「私にも色々予定があるのだよ、今回の出来事に関してもね」

『魔王』とは違い、ヘラヘラした声が白衣を着た男から発せられる

「まあいいでしょう……………今回のガジェット……………あれは貴方が？」

「ふむ……………」

白衣の男は顎に手をやり、少し考える仕草をした。

「そうだね……肯定もできるし、否定も可能さ」

曖昧な答えが返ってくるが、『魔王』気にした様子もなく言葉を続けた

「…………質問を変えましょう。あなたは『高町なのは』を襲ったガジェットを製作されましたか？」

「その答えを知りたいかね？」

『魔王』は答えず、沈黙がしばらく続く

「……………」

「……………」

先に沈黙を破ったのは『魔王』だった

「いえ、今の貴方の沈黙でわかりました。…………あなたはあのガジェットを製作してはいない」

「ほう？」

「理由など沢山ありますが……例えば最高評議会など。おそらくあのガジェットの設計図を盗み、それで製作したのでしよう。」

「おっと話が逸れましたね。」

「……正解だ」

白衣の男は意外そうに言う。『魔王』はふふっと笑い、腕を組む

「私との約束を覚えていられるだろうか？」

「……ああ、覚えているとも」

「よろしい……ならば次は何をすればよろしいかな？」

「そうだね………実は私は今とある研究をしていてね、あるデータを取ってきてほしいんだ」

「データ………と言いますと？」

「プロジェクトF……プレシア・テストロッサの娘のクローン、
『フェイト・テストロッサ』の戦闘データさ」

「聞いたことはありません。わずか九歳でAAAランクを持つ管理局
の期待の星だとか……」

その少女の戦闘データがほしいのですね？」

「まったく……君には驚かされるな、私の考えていることでもわかるのかい？」

「冷静に考えれば解りますよ。貴方の仕草、表情、クセ、全てを観察すれば

相手の思考などは手に取るようにわかります。

例えば……貴方は何か考え事をしている時に顎に手をやる……など
ですね」

白衣の男はハッとし、いつのまにか自分が顎に手をやっていることに
気づいた。

その行動に『魔王』は再びふふっと笑い、

「わかりました。では三日後、再びこの場所で相見えましょう……
無限の欲望、『ジェイル・スカリエッティ』」

そう言って『魔王』は踵を返し、暗闇に消えていった

三奏目（後書き）

お、とーさん、おとーさん、まおーうがなーにかいーうよー

四奏目（前書き）

作者は国語が苦手です。

よって小説の表現法はネットで血眼になって探しています。

ここはこういう表現のほうがいいんじゃないか？や、

この文の使い方は間違っているなどの意見を沢山まっています。

よろしくです

四奏目

「……………」

美しい金髪を靡かせながら、管理局の魔導師フェイト・テストロッサは夜空を飛んでいた。

しかし彼女はいつものような穏やかな顔ではなく、悲しい表情を浮かべている。

理由はもちろん、なのはの事だ。

執務官試験が近いため、勤務時間の間を使って勉強していた最中、その知らせがクロノによって伝えられた。

報告を聞いた彼女は勉強中の手を止め、真っ先に病院へ駆けつけたのだが、
当然、まだ手術の最中でありフェイトは手術室の前で祈ることしか出来なかった。

そのうち医者の方指示によって、今日は帰ることにしたのだ。

「…………大丈夫…………なのはは…………助かる…助かる…………助かる。」

飛ぶ速度を落とさず、フェイトは自分に言い聞かせるように何度も何度もその言葉を口にする。

今まで2年間、一緒に戦ってきた仲間が重傷を負ったのだ、冷静でいられるはずがなかった。

そしてしばらく飛んでいると、管理局のビルが見えてきた。そこが今日のフェイトの寝床だった。

「…………今日は…………眠れないかも…………」

試験勉強で睡眠不足なはずなのに、フェイトは今全く眠気が来なかった。

それほどまでショックを受けているのだ、昔の彼女なら精神が壊れていたのかもしれない。

「大丈夫…………なのはは…………すぐ帰ってくる。…………また微笑んでくれる。…私にはわかってる。」

「ほう…………それはどうしてだ？」

「っ!？」

突如聞こえた声にフェイトは辺りを見返す。

するとさっきまで誰もいなかった自分の後ろに、男が立っていた。

怪しい仮面、黒いフード、赤や黒色の着色をした禍々しい服。

そう、『魔王』がそこに立っていた。

「なっ!!??？」

「ふむ…いい反応だ……」

すぐさま高速で距離を取ったフェイトに『魔王』は関心した。

「驚かせてしまったかな？フェイト・T・ハラオウン。

……初めまして、私は『魔王』という者だ。」

軽くお辞儀をした『魔王』の出現に対してフェイトは疑問を持った。

「『魔王』……?……なぜ私の名前を……いや、それよりいつのまに……」

魔導師は、常に魔力という反応を出している。

それは匂いと同じようなもので自身を中心に円上に散布され、特定のセンサー、デバイスなどなら感知が可能なものなのだ。

「バルディッシュの魔力反応に引っかからないなんて……あなたは一体……?」

しかし、『魔王』という魔導師は違った。

センサーで感知されないほど『魔王』の魔力が少ないのか、それとも特殊な何かで反応を出さないようにしているのか、どちらにしろ最新のシステムを積んでいるフェイトのバルディッシュでさえ

『魔王』の接近に気づかなかったのだ。

「私のことなどはどうでもいい…

少し聞きたいことがあるのだが、よろしいかな?」

「……………なんででしょう?」

魔力センサーに反応しない魔導師、怪しさが十分すぎる理由で、フェイトは『魔王』を警戒する。

「今日、貴様達管理局員の中で一人の少女が重傷を負っただろう？
名は……高町なのはと言ったか？その容体を教えてほしい」

「っ……………」

親友の名が出てきて少し顔を歪めるが、フェイトはすぐに元の表情に戻った。

「どうしてあなたがなのはの事を？」

「なに、噂で耳にして心配だったものでな。たいした理由はない。」

「噂……そうですk……？……っちょっと待ってください」

納得しかけたフェイトだったが、ふと疑問に思ったことを『魔王』に聞いただす。

「あなた……どうしてそこまで知っているんですか？」

「……………どうして……とは？」

「なのはが大怪我を負ったことは一部の関係者……
またはなのはの治療関係の医師の方々しか知っていません。
さらに下への報告では確か『管理局員、任務中に重症』としか発表
されてないはずですよ。
…なのに部外者であるあなたがどうしてその事を知っているんです
か？」

「……………」

「……………教えてください」

「……………」

「つ……バルディッシュ！」

「Set Up」

答えない『魔王』に対してみるみるうちに目つきが鋭くなるフェイト。
ト。

バルディッシュを起動し、矛先を『魔王』に向ける。

「もう一度聞きます……教えてください、あなたは……
あなたは どうして『なのは』が重傷だと知っていたんですか？」

「……………」

「……………」

「……………ふふっ」

「……………っ！」

無言でフェイトの推理を聞いていた『魔王』だったが、しばらくするとその口を開く。

「……管理局員は無能な奴しかいないと思っていたが……頭の切れる者もいたようだ……なかなか面白い。」

「っー！」

さきほどとは打って変わった低い声を発する『魔王』その変化にフェイトはより警戒を強める。

「たったあれだけの言葉でよくここまでの結論にたどり着いたものだ。

……そうだな、貴様も私のいい遊び相手になってくれるのかもしれない

ん」

そう言って『魔王』はポケットの中に手を入れる。

「いいだろう、貴様の質問に答えてやる。……私がなぜ高町なのはの
ことを知っていたか………
それはな……」

「……………ッ！！」

「泣け、『八咫鳥^{やたがらす}』よ」

突如『魔王』はポケットに突っ込んでいた手を抜き、紫色に光る宝
石を出す。

すでに宝石は赤黒い光を発しており、
次の瞬間には『魔王』の左手に紅い刀身を着けた銃剣が握られてい
た。

『魔王』はそのまま銃口をフェイトに向けニヤリと笑う。

「あの場所に私がいたからだ」

[Calamity Shot]

ボンッと大きな爆音をたてて、災難の散弾がショットガンのように発射された。

「ち……」

近距離での広範囲射撃。

普通の人間なら避けることはほぼ不可能なのだが、

「…やはりこの程度で殺られるはずはないか」

しかし撃った弾は何にも当たることなく夜空へと消えていった。

「今の距離で避けるとは…流石だ。」

AAAランクというのは伊達ではないらしい」

銃剣を肩に置き、

『魔王』は視線を斜め上の空に向けた。

「……お前が」

そこにいたのは漆黒の死神。

紅い目に黒いマント、バリアジャケット、鎌のようなデバイス。

「じゃあ…お前が…お前が…」

さらに今彼女が纏っている魔力。

「お前がなのはをおおおおおおおおおッ!!」

これを死神と呼ばずに何と呼ぶのだろう。

「うあああああああッ!!!!」

フェイトは信じられない速度で『魔王』に突撃していく。

「ははは…おもしろい!」

しかし『魔王』は突進してきたフェイトに答えてるように銃剣を構えた。

「あああああああッ!!!!」

「っ！！……なに？」

降り下ろされたバルデッシュを、『魔王』は銃剣でギリギリ受け止めたが

形成された魔力刃が微かに『魔王』の頬を傷つける。

少し顔を歪めた『魔王』だったが、すぐさまフェイトの顔を見てニヤリと笑う。

「そうか、殺傷設定か…ふふふ、いい目をしているな、フェイト・テストロッサ？」

「うるさいっ……！！！」

「私が憎いか？」

怒りで自分を見失っているのではないか？」

「……うるさいッ！！！」

「まるで人形だな」

「だまれえええええええッ！！！」

その目には復讐の念しか宿しておらず、彼女は無意識の内に非殺傷設定を解除していた。

「ハハハハハッ」

「当たれ！当たれ！当たれええ！！」

型など関係なしにバルデッシュを振り回すフェイトを見て『魔王』は笑った。

彼の目には駄々をこねている子供にしか映ってないのだろう。

「つと…危ないな…」

少し体勢を崩し、後ろに下がった『魔王』を見てフェイトはチャンスとばかりに呪文を唱える。

「フォトンランサア！！」

声を荒げながら、
無数の槍弾がフェイトの周りに形成される。

「ファイアアッ!!」

無数の弾が発射されるも、『魔王』は慌てることなく、向かってくる弾に銃口を向ける。

「遅いな…カラミティ・ショットッ!」

銃剣から発射された散弾は一瞬で全てのフォトンランサーを破壊した。

「っ!! あああああ!!」

しかしそんな事も気にせず、またフェイトは『魔王』に攻撃を繰り返す。

「はああああ!!」

「ふんっ」

再び鏢釣り合いになった時、初めてフェイトが『魔王』に聞いた。

「…く、答えろ！！なぜなのは狙ったっ！！」

「少しは冷静さを取り戻したか…そうだ、それでいい。…むん！」

「つくあ！？」

『魔王』はバルデッシュを大きく弾き、お互いに距離をとった。

「怒りに身を任せて戦おうなど無謀な事この上なし。

戦場で冷静さを取り戻さなければ…待っているのは死だけだ。」

「…っ」

「高町なのはもそうだったが…お前達はどうも自分の限界というものを知らないようだ。

ろくに休みを取らず働き続けた…その結果があの様だ」

「…なにが言いたい！？」

「さあな…自分で考えることだ。

……さて、そろそろ終幕だ、悪いが終わらせてもらおうぞ」

「っ！！」

「ふふ……」

どんな攻撃が来るか、フェイトは『魔王』の行動を観察した。
しかし『魔王』はフェイトに銃剣を向けず、真上に銃口を向けた。

「…？」

謎の行動にフェイトが不審がっている中、
『魔王』は引き金に人差し指を掛け

「ショット」

その引き金を引いた。

さて、ここで問題だ。

人間が何も支えもなく、大砲を撃つとどうなるか？

もちろん、発射された玉の反動により少なからず後ろに下がってしまふ。

ではこれが空中で、人間が真上に向かって威力の強い銃を打ったらどうなるか？

「なっ！……！」

そう、その弾の威力に比例する反動によって高速で下に落下するのだ。

「ハハハハハハハッさらばだ！！また会おう！！」

「っ待て！！……くっ」

フェイトが追いかけようとするが、すでに『魔王』はバシャアアンと大きな音をたてて海の底に消えていった。

逃亡。

これが『魔王』の終幕だった。

「っ！……！！……魔王おおおおっ！……！！……！！」

夜空には虚しくフェイトの叫びが響いた。

四奏目（後書き）

主人公が出てない……

五奏目（前書き）

やっとう主人公とうじょーっ！

本格的なデバイスとのやりとりはこの作品が初めてです

五奏目

「えーっとお……ここで合ってるよな」

地図と目の前の看板を見て再確認……きーどーうろつか、と。うし、合ってるな。

「おいおい、漢字くらい普通にわからうぜ……」

俺の腰から実に人間くさい言葉が発せられた。

「うるせえなアッシュ……ミッドの言葉難しいんだっての。お前はデバイスだがらわからんと思うがな」

「でもこっちきてもう13年なんだろ？さすがに慣れない？」

「……………人間はな、言葉だけで生きていけるんだよ。」

「なぜか日本語が通じるミッドチルダ。あぁら不思議、さすがアニメ」

「メタ発言やめい。しかも今回は小説だ。アニメじゃない」

こんなバカな会話をするのははや日常茶飯事……と紹介し忘れた。

さっきから俺と喋っているのは俺のデバイスだ。名前はアッシュ。どうやって手に入れたのかは忘れた。てか覚えがない。気が付いたらあったって感じだ。

でもまあデバイスってのは欲しかったし、俺はあんま気にしてない。今ではいい相棒さ。

「しっかしなんで俺が機動六課なんかに……」

「いいじゃねえか、たしか美女揃いつて聞いたぜ？」

「誰に聞いたんだよ」

「さあてな」

「……………」

ま、こんなところでいつまでも立つとくわけにもいかんか。無駄話はこれくらいにして、そろそろ中入りますかね。

「おっじゃましまーす」

ゲートをくぐり、少し緊張しながら局内に入る。

「……わお」

「へっえ〜」

びっくらこいたね、広さ的な意味で。

外からじゃわかんなかったけど、中はものすごく広かった。

しかも最近出来たのか壁とかも綺麗だ。

「すっげえ。前の所の10倍はあるかもなあ」

うん、俺もその事にはすごく同意するわ。

「どうする？探検でもするか？」

「いや、まずはこの責任者に挨拶だな。えーっと……あ、あいつでいいや」

場所がわからなかったので誰かに聞こうとして、ふと目に止まった女性に俺は近寄った。

「その人、ちょっとすいません」

「む……なんだ？」

振り返った女性はすごく美人だった。ピンクの髪にポニーテール、なんともすばらしい。

見とれているのもアレと思われるのでさっさと要件を言う。

「この責任者って誰でしょうか？出来ればどこにいるかも教えてください」とありがたいです」

「……責任者は我が主だが……貴様見かけない顔だな。主に何か用か？」

ジロツと睨まれた。でもなんか敵意はなさそう。

「ええ、実は今日からここに異動するハメ……っと失礼、異動することとなりましたので、その挨拶にと」

「異動……？ ああ、お前か。朝主が言っていたのは」

お？ なんか俺の事知ってるっぽい？

「主から話は聞いている。ついてこい」

そう言ってその人は歩いて行った。俺も大人しくその人の後を追う。あ、そういえば名前聞きそびれた……まあいいか。

「……………おお」

しばらく歩いていると窓から訓練所らしきものが見えた。

ビルが立ち並び、ドーンとかバーンとか聞こえる。誰かが訓練でもしているんだろうな。

「訓練所が気になるか？」

「え？ ……あ、はい、まあ」

いきなり話しかけられたのでなんとも微妙な返答をする俺。うっわ、なっさけね。

（「あゝあ、人間第一印象が大切だったのに……」）

黙れや。

「そんなに気になるなら後で見に行ってもいいぞ。今は新人達の訓練中だからな」

「へえ……」

「……………ところでお前、名は何という？」

クルツと振り返って腕を組みながらそんなこと言われた。
俺は一応軽く敬礼をし、

「つと。自分『雨宮伸二』と申します。階級は二等陸士です」

「雨宮か……私はシグナムという者だ。今後、よろしく頼む」

少し笑うシグナムさん。なんだ、結構普通だな。

「ええ、よろしく願いします」

一通りの自己紹介をした後、俺は部隊長室に案内された。どうやらここにいるらしい。

シグナムさんが扉をノックすると中から声がした。

「ここだ、入るぞ」

シグナムさんの後を追って中に入る。

すると中には一人の女性が机で何かの作業をしていた。

「おーシグナム、案内ご苦労やなあ」

「いえ、主のためならば」

「……………え？」

ん？主？

……この部屋には俺とシグナムさんとそこにいる小柄な女性しかない。

ってことは……え？主って……部隊長って……

「んで君が……ってなんや、どうした？鳩が豆鉄砲喰らったような顔して」

おそらく今の自分の顔はたいそう間抜け顔のはずだ。

「おい、雨宮、主に失礼だぞ」

聞き間違いじゃなさそうだ、ってことは……

「……あの、少し聞いてもよろしいでしょうか？」

「なんや？」

その真実を知るためいくつか質問をすることにした。

「……部隊長？」

「そうや。ここ、機動六課の責任者であり、部隊長の八神はやてや」

ぶっー！！

「……主？」

「は？……ああ、シグナムがそう呼んでたからか。まあそこは気にせんでええよ」

……まあそこは気にするなって言うから別にいいか。

「……………すみません、最後に一つよろしいですか？」

「うんええで？」

「……………今おいくつで？」

「19歳や」

「……………」

うそーん

「さっきからどうした？」

いやいやどうしたじゃないっすよシグナムさん。

だって俺より年下がよ？階級上で？ここの責任者？……………うっはー。

「いやあ…まさかこんなに若いお嬢さんが部隊長とは思わなかっただけです」

「ああ…そういうことか……………ふふ…まあ初めはそう思うかもな」

「お世辞か？　なんや結構おもしろい人やな」

2人してニヤニヤ笑いながらこちらを見てくる。
……なに？　この敗北感？

（「なっさけないね〜大将」）

さっきからあんたはうるさいよ。

「……………うっし」

ま、来ちゃったもんはしょーがない。ここが新たな職場になるんだし、あいさつは大切だよな

さっきシグナムさんにした敬礼よりピシッとして、俺は報告した。

「今日からここに異動することになった。雨宮伸二二等陸士です。今後よろしくお願いします」

一応お世話になる上司だからね。感謝の気持ちは忘れたらあかんぜよ。

「うん、こっちこそよろしくなあ？」

「ええ、よろしくです」

「……………ふふ……………お前はいい面構えだ」

八神部隊長が握手を求めて手を差し出してきたので俺はその手を握

った。

さーって、がんばりますかね

五奏目（後書き）

自分なりにがんばった文です。

キャラ設定 (前書き)

雨宮のキャラ設定です。

デバイスのイメージは戦国BASARAの佐助の武器と、KHのア
クセルの武器を想像してください。

キャラ設定

名前 雨宮 伸二

年齢 23歳

身長 176cm

体重 62kg

髪型 赤黒い色のアシンメトリー

魔力 C

魔力変換資質 『炎熱』

魔法術式 近代ベルカ式・陸戦Bランク

出身 第97管理外世界「地球」極東地区日本

所属 時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課
イチ ロングア

階級 二等陸士

役職 通信主任兼メカニック（整備担当）

所持資格 メカニックマイスター／B級デバイスマイスター

StrikerS本編では23歳。8年前、重傷だったのはを偶然発見し救出した本人。

しかしなのは自分が誰に助けてもらったのか知らず、
雨宮も8年前の出来事なのでなのはの事を忘れてしまっている。

元々魔力が低いいためか戦闘は好まず、どちらかというとデバイスを弄るほうが好き。

しかしまったく戦闘が出来ないことはなく、一応Bランクは保持している。

戦闘ではデバイスを投擲する遠距離戦闘、そのまま斬りつける近接戦闘など、どんな相手にも
対応できるようにしている。

昔から右の耳に青い玉が付いたピアスを着けており、自分自身もいつ着けたのかわからない。

基本ブーツとしているめんどくさがりやで、物事全てが中途半端な性格。

実は何らかの病気を患っているが、命に別状はないので本人はあ

まり気にしていない。

人格式・投擲大型手裏剣型アームドデバイス

『アツシュ』

雨宮が所有する投擲型という珍しいデバイス。

リボルバー式カートリッジシステム付き。装弾数は12発と、一般のデバイスに比べて多い。

形状はY字形の先に刃が付いており、その中心を持ち手とする。色は黒。

本来ベルカ式というのは近距離戦が主で、遠距離は苦手とするが、アツシュは本体で斬る事も出来、投擲して攻撃することも可能なので非常に攻撃範囲が広い。

しかも投擲時はコントロールはアツシュが行っており、命中精度は高い。

人格の性格は明るいというより掴み所がないが、時折驚くほどの冷酷さをみせることがあり、さらに雨宮の病気に
ついて何かを知っている。

待機フォーム

赤色のハート形のアクセサリ。腰に着けている。

アクセルフォーム

炎熱属性をアッシュに同化させ、常に炎を纏った状態にする突進フォーム。

このフォーム時は手裏剣のような形だったアッシュは、輪に『十』をクロスさせた
チャクラムのような形状に変化し、白と赤が主な色合いになっている。

六奏目（前書き）

今回は書いていて面白かったです。

六奏目

（8年前）

「……………」

多くの器材が立ち並んでいる部屋で、とある男の科学者はパソコンを弄っていた。

彼以外部屋には誰もおらず、キーボードを叩く音だけが響く。

「……………ふむ」

紫色の長い髪をたくし上げ、彼……次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティはピタッとキーボードを叩いていた手を止める。

「約束にはまだ二日余っているが……もしかしてもうデータが手に入ったのかい？」

誰もいないはずの部屋。

しかしジェイルは何者かの気配に気づき、座っていた椅子を回転させ後ろを向く。

すると自分以外は器材しかに部屋に誰かがいた。

「こんばんは……少し予定より早いですが、あなたのお望みどおり彼女のデータを手に入れて来ました」

そう、『魔王』がいた。

「……………はあ」

突然の来訪者にもスカリエッティはたいして驚かず、小さくため息をつく。

なぜなら『魔王』はこの隠れ家の警備をいくら厳重にし、錠をしてもいつも全てを突破して入ってくるのだ。

「一応この警備システムは私が造って最先端の技術を使った物なんだがね……」

くくく…君が毎回そんなに簡単に侵入してくると自信を無くすよ」

自信を無くすとは言ってはいるが、なぜかスカリエッティの顔は嬉しそうだ。

「それは失礼した……では今後からは堂々と入ってきましょう」

「君がそんな事をした暁には、私のラボはガジェットの残骸で溢れているだろうね」

「ふふ……わかっているのならなによりだ」

「……………ふむ、そうだな。そう考えると君の行動は私のためでもあるのか

……………おっと、そろそろ本題に入ろうか」

警備云々を訴えるのは無駄と悟ったのか、スカリエッティは本題に入ることにした。

「そうですね……では、これが約束のデータディスクです」

シュツと。

『魔王』は懷から出したディスクをスカリエッティに向けて投げた。

「おっと」

そしてパシツと。

スカリエッティは器用に人差し指と中指の間でそのディスクを挟み取る。

「危ないなあ、壊れたらどうするつもりだい？」

『魔王』はふふつと笑い

「その時はまた行って差し上げましょう」

「……ほう？」

この発言にはスカリエッティも驚いた。何せあの『魔王』が気を利かせているのだ。

逆に裏があるんじゃないかと疑ってしまう。

『魔王』はスカリエッティの表情で何を考えているのか理解したのか、

「勘違いしないで頂きたい。私が興味を持ったのはあの女のことだ」

すぐさま否定の言葉を口にする。

「あの女?……フェイト・テストロッサのことかい?」

スカリエッティの言葉に『魔王』はゆっくり頷く。

「そうです。彼女のあの執念……あの憎悪……いい遊びになりそう
だと思わないですか?」

「……悪いが私には君が考えていることはわからないな」

「そうですか、それは残念だ……」

フェイト・テストロッサと高町なのはは私と共に遊んでくれる人材
だ。

あの者達は実らせれば確実に私を追ってくる……言うなればこれは
ゲームなんです」

「ゲーム……とはね」

顎に手を添えて、スカリエッティは考える仕草をする。

『魔王』にこの仕草が自分もクセと言われたが、これは直せるよう
なものではない。

結果スカリエッティは深く考えないようにした。

「そう、ゲームです。」

私は彼女たちが実るのを待ち、そして彼女たちに『遊び』を与えま
す。

そしてそのいくつかの『遊び』を解決できれば……彼女たちは私に
たどり着くのです」

「……………」

「しかし解決できなければ……ま、これは私の見込み違いということになりますね」

「……少しいいかい？…君はなぜそんなことをするんだい？
わざわざ彼女たちにチャンスを与える必要はないだろう？」

もったもた質問だ。言うなれば『魔王』は管理局に自分を捕まえて
みろと言っているのだ。

「……………私は退屈の身でしてね、『遊ぶ』ことが唯一の楽しみなん
ですよ」

「『遊び』とはなんだい？」

「それは……八年後に解りますよ。
……それで私は今から少し身を隠そうと思います」

「っ！？、どうということだい？」

「作戦を練る……と言いましょか。計画は時間を掛けるほど完璧
になります。

私は今から『遊び』の準備をしなくてははいけませんので……それで
は失礼します。

八年後……また会えるでしょう、その時まで私の計画を楽しみに待
っていてください」

「……………」

そうやって『魔王』は普通にドアから出ていった。なぜ警報が鳴らないのかなどはスカリエッティの頭にはなかった。

元の空間……いや、一人に戻った部屋で、スカリエッティは頭を抑え、小さく笑う。

「くくく……やはり君は面白いな……いいだろう、君の計画、しかと見届けさせてもらうよ。」

……しかし、君が『遊び』ををすると言うのなら……私は……そうだな……」

しばらく考え込み、ふと何かが思いついたのか口元を上げる。

「そうだ……『祭り』だ。……彼が『遊び』なら……」

私は『祭り』の準備をしよう!!……くくく……あははははははは!!」

.....

八神部隊長との挨拶を交わしたあと、俺は職場に案内された。
実はというと俺がここ、機動六課に異動してきた理由は単なる局員不足なためだ。

「ちょうど人手が足りなかったんですよ。だから雨宮さんみたいな人が来てくれてありがたいです」

両手を合わせて微笑んでいるのはシャリオ・フィニーノ一等陸士。さっき知り合った。

連れてこられた俺の職場はデバイスルームと呼ばれる、その名の通りデバイスを整備する部屋だった。

「いやあ、まさかA級デバイスマイスターの資格を持つてる人に出会えるなんて光栄っすね」

これは本音。A級なんて持つてる人俺は初めて見るし。

「そんな、たいしたことじゃありませんよ」

「……ははーそっすかーへーすごいすねー」

たいしたことないって……あんたその資格取るのがどれだけ難しいのか知ってる？

日本で言う漢字検定一級と英語検定一級を一気に両方取るくらいの難しさよ？

まあ俺はそれが出来ないからB級なんだけどさ……

「とりあえず器材の説明やら仕事の手順などを教えるね？」

「うい、よろしくっす」

・・・・・・・・・・・・・・・・

（約30分にわたる説明）

「（）てな感じですけど、覚えましたか？」

「ええ、大体」

キングクリムゾン！……ではなく、ぶっちゃけ専門用語連発の描写書いても解らないっしょ。
だからちよいと飛ばしたよ。

「じゃあ、私これからフェイトさんの手伝いに行つて来るから。

今日はこの部屋の端末に慣れてね。それじゃ、また昼に会いましょね」

「いってらっさーいっす」

「いってきまゝす」

そう行つてサクサクとデバイスルームから出ていった。……ところ

でフェイトさんって誰？

「シャリオ『一等陸士』が『さん』ずけかあ……階級なんだろうなあ……
ま、いっか。……むっふいっつはあ！……」

俺は背筋を伸ばし、改めて部屋を見渡す。

「こーやって見ると、やっぱ広いよな。大将、ここにきて正解だったんじゃないの？」

「かもな」

「……やれやれ、ずっと黙っているの結構暇なんだよな」

「しゃーねーだろ、お前も色々いじくられるの嫌だろうし」

俺がデバイスを持っていることを知っているのは今んとこ八神部隊長とかの隊長群のみ。

なんかアッシュの投擲型デバイスは珍しいらしく、前の職場でも毎回「見せてくれ」「弄らせてくれ」などとマジうざかった。

なのでここ、機動六課では俺がデバイスを所持していることを秘密にしているのだ。それがシャリオさんでも。

「ふう〜」

俺は軽く深呼吸をして、目を閉じる。

「…………アッシュ、外に人の反応は？」

「おっと…………少し待ちな……………ないね、少なくとも半径20mくらいは」

「そうか…………ならば問題はないな」

「へえ？行動開始ってか？旦那？」

「そうだ…………さて、シャリオ先生が丁寧に教えてくれたお陰で操作は慣れた…………」

あとは俺の腕だな…………」

まずは…………さしあたりこの機動六課の構造の把握だな。

「…………ふん」

俺は端末を弄り、とあるページを開こうとしたが、画面に「ERR OR」の文字が出る。

…………ブロックしているのか？

「アッシュ……このセキュリティを解除しろ」

「了解、旦那がそう言うのなら」

さて……ここはアッシュに任せるとして、次は……

「ほう？……戦力情報とは……興味深い」

あるフォルダを開く。するとそこには機動六課の戦闘員情報が繊細に記してあった。

「一人一人細かく記してあるな……まあどうでもいいか」

……それでも一応目を通しておいてもいいだろう。

俺はカリカリとスクロールを繰り返す。

「……………む？」

しばらく下にスクロールしていく。するとそこに気になる名前を見つけた。

『フェイト・T・ハラオウン』

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン……さつきシャリオが言っていた女か」

その項目をクリックする。

「どれ……出身、ミッドチルダ南部アルトセイム……聞いたことはないな……。」

所属、時空管理局本局執務官（機動六課に出向中）、階級は一尉扱い。

役職、執務官／ライトニング分隊隊長。

局員ID、STX01220-015214230。コールサインはライトニング01。

魔法術式、ミッドチルダ式・空戦S＋ランク。……S＋？」

「どうしたんだい？ 旦那？」

「……………機動六課の新設の理由、覚えているか？」

朝に八神と挨拶したときに聞かされた。

「確か、『ロストログア関連の危険な任務を扱う古代遺物管理部の機動課、第六の部隊』だっけ？」

そう、奴は確かにそう言っていた。

「……なんだこれは……」

気になって他の隊長群を調べた。

「八神はやて二等陸佐……総合SSランク」

「ダブルSッ！？ なんだよそれ！？」

「少し黙ってろ……ヴィータ三等空尉……空戦A A A十ランク？」

……どうということだ？

「シグナム二等空尉……空戦Sーランク……そして……」

俺は最後の人物の名前をクリックした。

「……………高町なのは一等空尉……空戦S十ランク……ん？」

「……旦那、どうした……」

モニターに写る『高町なのは』の画像。

……どこかで見たか？

……………まあいいか

それにしても……ただのロストログアの任務だけの部隊にしては……
戦力が異常だ

「普通、こういったエリート魔導師は局に二人いるかいなかだ……
……それなのにこの詰め込みようは一体……」

「考え中悪いけど、少しいいか旦那？」

頭を回転させているとアッシュから報告がきた。

「すまねえ、このセキュリティは並のソフトじゃねえと解析不可だ」

「……………そうか」

……………大人数の戦力導入、謎の……………そして嚴重なフォルダ……………

「機動六課……………真の目的は一体……………」

おそらくロストログア関連の任務を扱うというのは偽りだろう……………
ならば何か目的があるはず……………

「……………っ？ 旦那、メールが来てるぜ？」

メールだと？

「内容は？」

「……………あ？ なんだこりゃ？」

「……………どうした？」

めずらしくアッシュが妙な声を出す。

「……………見たほうがいいぜ、ほら、見て見な」

「む………………なんだこれは？」

俺の目の前にモニターが表示される。

そして本文の所にはただ一文。

『かわいいぼうや　ぼくのところへおいで一緒に遊ぼうよ　楽しいよ』

謎の文章……これは一体……？

差し出し人は……

「……『魔王』？」

六奏目（後書き）

お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、これはあのゲームをモチーフにしています。

ただ、展開は大きく変わります

七奏目（前書き）

主人公は……雨宮です!!

どうでもいい作者愚痴

へえあ「レイン〇ーアートってほしくね？」

伸二「あのどこでもスーイスイの、DXも出ているあれか」

へえあ「そうそう、メガブラシがついてるアレ」

伸二「どうでもいいな」

へえあ「は？何でだよ、水がこぼれないんだぞ!？」

伸二「知るか!!」

七奏目

「魔王……だと？」

どういうわけだ？ 俺の知り合いに『魔王』などと言うふざけた名前の奴なぞいなかったはずだ。
さらにこの文章…

「かわいいぼうや、ぼくのところにおいで一緒に遊ぼうよ、楽しいよ……？」

一見意味不明な文章なのだが、俺はその文を見ているとふと違和感を覚えた。

「…この文…どこかで……」

ビーツビーツ

「……む？」

開いていたメール画面に突如、赤色のウィンドウが開き見えなくなる。

『ALART』

そしてその文字がデカデカと画面に映し出される。
アラート。つまり緊急事態だ。

「?……事件か？」

「旦那……どうやら事件が起こったようだ……だったら今ここにいるのは、まずいんじゃないの？」

「………」

召集が掛かっていないとすると……八神は今六課にはいないようだな。

ならばその事件の関係でここに人が来る可能性もあるか……

「だろうな、ではさっさとずらかるとしよう」

言い訳は……部屋にでも戻って……寝ていたことにするか。

「まあ今の短時間でも十分な情報が得られた。それを考えればよしと………」

イスから立った瞬間、俺は妙な感じに囚われた。

「……………」

突如軽い眩暈が俺を襲い

「……………」

意識が

「……………」またか

遠のいて…

「あらら……………」お休み、大將

アッシュの声を最後にそのまま俺は意識を失った。

……………

「ふむ……………」

「どうですか？ドクター？」

モニターに写るフォアード部隊を、険しい顔でスカリエッティは見

ていた。

画面の向こうではスバル達が着々とガジェットを破壊して行っている。

「機動六課…そしてこれが戦闘の新人達…か。
…なかなかだね、おもしろい」

「……そうですか」

スカリエッティの言葉を流しながら、戦闘機人No.？、ウーノは端末を弄っている。

「彼女達的能力は何かを感じさせる…くくく…おもしろい、ああおもしろい!!」

「……はあ……あら？」

壊れたように笑い続けるスカリエッティを半場呆れたように見ていたウーノだったが

「なっ！？これはっ…」

いきなり焦った表情に変化し、指を高速で動かして画面になにかを打ち込む

「通信！？……一体だから…!!」

「はははh…ん？どうしたんだいウーノ？」

珍しく慌てて端末を弄っている姿に不信に思ったスカリエッティは

笑うのを辞める。

「そんな…早すぎる…」

「なにかトラブルかね？」

ウーノは視線を端末からスカリエッティに向け、ゆっくりと口を動かす。

「ドクター…何者かが私達のラボの通信にハッキングしてきました…」

その言葉にスカリエッティはピクつと眉を動かした。

「ほう？この施設のセキュリティと突破するとはなかなかの人物だね？」

『そう言っていただけでは光栄ですね』

「っ!!」

突然施設全体に響く青年の声

「…この声は…」

不思議がっているウーノとは違い

「……く……く……く……く……あはははははははははは……!!!!!!」
「……!!」

スカリッティは慌てることなく逆に口元がどんどん上がっていく。

「ああ!!、そうか…もう8年か…そうか、そうかそうかそうか!!」

「ドクター…?」

「そうだ!! 8年だ、君か!! 君がまた来てくれるとは!!」

先ほどとは比べ物にならないほどの笑みを浮かべ、狂ったように体を回転させる。

『お久しぶりですね、ジェイル・スカリエッティ』

「ああ！！本当に久しぶりだ！！私が君との再会をどれほど待ち望んでいたことか！！」

「あの、ドクター？」

「はあ…はあ…なんだいウーノ！！」

若干息を切らしながら不気味な笑みを浮かべているスカリエッティに、ウーノは若干引きながら聞いた。

「あ…あの、この声の主は一体？」

「ああ、そうだったね、君達姉妹は知らなかったね、彼は…」

『自己紹介はまた後ほどでよろしいかな？今は時間があまりないのだ』

言葉を遮られ、スカリエッティは残念そうな顔をする。

「…それは残念だ、せつかく君に私の娘達を紹介してあげようと思っただがね……」

しかし、なぜ時間がないのだね？」

顔は見えず、スピーカーから『魔王』の声だけが部屋に響く。

『ふふ…実はですね、今私はリアレールの近くにいるのですよ…』

「ふむ？」

『そこです、今六課の局員が破壊しているガジェット、その操作権をこちらに移させてもらいます』

「????意味がよくわからないが？」

『ようするに…今からここにいるガジェットは私が指揮をさせてもらいます』

「なっ!!何を言っているんですか!?!そんな事ができるはず…?!」

「…ガジェットドローンは自律行動だ。操作など可能なかね？」

驚くウーノを無視し、『魔王』はスカリエッティの問いに答える。

『まあ見ていれば分かりますよ…では、私は遊んでくれますので、失礼します』

プツ

スピーカーの向こうからの気配が消え、

部屋にはモニターに映し出されている戦闘の音しか聞こえなくなる。

「くくく、おもしろい…ウーノ、君も手を止めて一緒に見ないかい？」

「……いえ…結構です…それよりドクター、あの声の主は一体？」

八汰烏と呼ばれた宝石が鈍く光り、低く、冷静な感情が籠っていない女声が発せられる。

この宝石、『八汰烏』が『魔王』のデバイスなのだ。

「……ハッキング完了、マスターの指示によって動くよう、調整しました」

八汰烏の声と同時に『魔王』の目の前に複数モニターが表示される。

「よし……」

そこに写っていたのはスバル達、なのは達などであった。

「……では、機動六課、お手並み拝見といこうか」

.....

「おうりゃあっ！！」

スバルがマッハキャリバーでガジェットを打ち抜く。

「はああああっ!!」

ティアナがクロスミラージュでガジェットを狙い打つ。

「うおおおッ!」

エリオがストラーダでガジェットを斬る。

「フリードッ!!」

フリードの業火でガジェットが燃え尽きる。

「やったね、ティアナ!!」

「喜ぶのはまだ早いわよ。ガジェットはまだ残ってるんだから」

スバルが嬉しそうに笑うのを、ティアナが突っ込みを入れる

「でも、もうレリックの周辺にガジェットもいませんし、大丈夫じゃないんですか?」

「油断しちゃだめよエリオ。それが原因で命取りになることだってあるんだから」

「っ!、わかりました!」

「いい返事ね、さあ、皆!!、残りあと少し!、頑張っていきましょう!!」

「うんっ！！！！」

フォードメンバーは至って順調であった。

新型のガジェットが出てきたがキャロの成長によってフリードを制御も可能になり、破壊することも出来た。

レリックも今のところ確保できている。

そう、初任務は至って順調に終わる予定だった。

ある人物の介入がなければ。

[illegible]

「っこんのをっ!!」

ローラーブーツのお陰か、スバルは何とか耐え切った。

そしてそのままガジェットの体を掴み、ブローを入れようとするが

「スバルッ!! 危ないわよ!!」

「え？」

「シュートッ!!」

ティアナは驚いているスバルの後ろ目掛けて素早く魔法弾を撃つ。

咄嗟に後ろを向いたスバルが見たものは、今まさに自分に攻撃をしようとしていたガジェットの姿であった。

そのガジェットはティアナの射撃にいち早く気付き、すばやく後退し、魔法弾を回避する。

「ティア!! ありがとう!!」

「馬鹿、お礼言ってる場合じゃないでしょ!!」

周りをけん制しながらティアナとスバルはお互いに背を向け合流する。

「それにしても…どういうことかしらね……このガジェット達、今までとまったく動きが違うわ」

「うん、それあたしも思ってた」

スバル達が言うように、ガジェットは今までのようにただ攻撃という名のビームを撃つような行動ではなく、まったく動きが違った。

まず回避性能が異常に上がっていた。

ほとんどの攻撃が難なく避けられてしまう。

次に攻撃。

デバイスや、足など、ピンポイントのところを集中して狙ってくる。

「ガジェットは自律回路のはずよ…ならこの動きは一体？」

「わからない…エリオ達は大丈夫かな？」

咄嗟の行動が裏目に出たか、今スバル達とエリオは別行動をしていた

「今は無事を祈るしかないわね…っと、来たわよ!!」

「了解!!」

二人の無事を祈りながらも、スバル達はガジェットの軍勢に攻撃を仕掛けていく。

.....

「アクセルシューターッ!!」

スバル達がリニアールで異変に気付いた時、無論こちらでも変化が見られた。

「くっ…当たらない…」

なのはのアクセル・シューターを空中型のガジェットはまるで弧を描くように回避する。

「なのはっ!!」

フェイトもその異変に気付き、攻撃していた手を止め、一旦なのはと合流する。

「フェイトちゃん、何だか様子がおかしいよ!!」

「うん…さっきとはまるで動きが違うね…」

空中型ガジェットもまた、先ほどとはまったく違う動きをしていた。一機のガジェットを狙おうとすると他のガジェットが妨害してきたり、

攻撃を避けようとするとその避けた先にまた攻撃が来るなど、コンビネーションとでもいうのだろうか、

まるで中に人が乗っているような動きを見せている。

「どういことだろう…今までこんな事はなかったけど…」

「わからない…けど私達がやることは決まっているよね、なのは？」

「うん…そうだね」

二人はお互いに背を向け、そしてデバイスを構える。

「少し荒っぽいけど…行くよ、レイジングハートッ!!」

「はい、マスター」

「バルディッシュ、行ける？」

「問題ない」

二人は長年の相棒に確認を取った後、お互いに顔を向き合い、頷く。

「ディバイイーーーーンッ!!」

「サンダーーーーーッ!!」

迫り、攻撃してくるガジェットの軍勢にもなのは達は

「バスターーーーーッ!!!!」

「スマッシューーーーッ!!」

少しも怯えることなく応戦していった。

はるか崖の上、その広場では電子音のみが聞こえていた。

「問題はない、たかがガジェットだ、代わりならいくらでもある」

「ガジェット05はあの『ナツクル』を引きつけろ、ガジェット06から08は『ガンナー』の攻撃を回避しつつ、『ナツクル』にヒット&アウェイ戦法を仕掛けろ」

テキパキと指示を出す『魔王』。そしてその指示に忠実に指令を出していく八汰鳥。

八汰鳥はハッキング能力でガジェットのコアに潜入、

そしてガジェットに直接指示を出せるように調整したのだ。

「…ガジェット07、撃破。他ナンバー、『ガンナー』に追い詰められています」

「05は『ナックル』の引きつけを引き続き続行、絶対に追いつかれるな。

06と08は一旦後退、ガンナーのカードリッジ補充を待て」

「空中ガジェット、00から02まで破壊、08から012までが『雷光』に追い詰められています」

「09から全てのガジェットを一旦後退、その後12から15は『雷光』に自爆特攻、
10から11はその隙に後ろから攻撃を仕掛けろ。15から20は『星光』の気を引きつけろ」

「はい……」

一通りの指示を出し終わった後、『魔王』は一旦モニターを全て確認する。

「あの子供達は…ふん、回避に精一杯のようだな…これはこのまま
でいいだろう。」

『ナックル』と『ガンナー』のコンビは少し厄介だ…それに『星光』
と『雷光』の対処も…」

「『ガンナー』、08によってダメージが通りました。しかしその後『ナックル』によって破壊されました」

「かまわん、一撃入れただけでもいい。……05はその間にレリックを回収、空中ガジェット09に渡してこちらに持って来い」

「……………空中ガジェット09、撃破。レリック、奪還されました」

「…なに？」

「…レリックの受け渡しを『星光』が目撃。その場で破壊された模様」

「星光……………高町なのは……………」

「マスター、指示を」

「……………」

モニターの向こうの女性を見て、『魔王』はニヤリと笑う。

『魔王』の沈黙。それによって再びモニターからは爆発音が響く。

「…ガジェット05、06、撃破。地上ガジェットは全滅しました」

「……………」

「……………空中ガジェット10、11から20、撃墜。空中ガジェット、全滅」

八汰烏がガジェットの全滅を伝えても、『魔王』は依然表情を崩さないままだった。

「……………」

「目標、全て消滅。ハッキングモード終了……マスター、次の指示を…」

「……………ふん」

『魔王』は無言のままゆっくり立ち、浮いていた八汰鳥をやさしく掴む。

「……ふふ、やはりガジェットごときではあやつらを止めることはできないか…」

いいだろう、お前達がどう実ったか…私が直々遊んでやろう」

八汰鳥を握っていた拳を上を翳せる。

「八汰鳥、次はあいつらと遊ぶぞ」

「…はい」

宝石だった八他鳥は一瞬だけ光り、『魔王』の手にガンブレードが握られた。

「さあ……私を楽しませろっ!!」

崖だというのに、『魔王』は何の躊躇もなく走って飛び降りていった。

[illegible]

「はあ……はあ……ティア、大丈夫？」

「なんとかね……しかし、なんなのよあのガジェットは一体……」

脇腹を抑えながらティアナは疑問に思った。

「今回はなんとか倒せたけど……このままじゃ今後きついかも……」

「スバルさーんっ!!、ティアナさーんっ!!」

どこからか二人を呼ぶ声が聞こえる

「あ、エリオ!!」

「キャロも…よかった、無事だったのね」

上を見ると、そこにはフリードに乗ったエリオとキャロがいた。

二人ともガジェット苦戦していたものの、なんとか耐え切ったよう
だ。

「今からそっちにいきますねっ！！」

「うん、わかった!!」

エリオ達を乗せたフリードはゆっくりとりニアルールに近づいてい

く。

「はぁ…初任務だったのに散々ね……なのはさんになんて言えば…
…っ！！！？」

ティアナは安堵を浮かべた表情をしていたが、ふと上を見ると、フ
リードより上から何かが降ってくるのが見えた。
小さい…人のサイズの影が降って来た。

「エリオ！！下がちなさい！！！！」

「え？」

「遅い…ショットツ」

空中から降って来た人物は素早く何かを発射する。

「キュ~~~~ツ!!!」

「フリードッ!？」

その弾はフリードの翼に直撃し、体勢が崩れる。

「うわわわわっ!!!」

乗っていたエリオとキャロはバランスが乱れながらも何とかフリードにしがみ付いた。

しかしフリードはダメージが大きかったのかそのままリニアレールの上に着地し、

元のサイズに戻ってしまった。

「エリオ!!! キャロ!!!、……あんだ!!!、なにすんのよ!!!」

キッと、ティアナはいきなり撃ってきた人物を睨みつけた。

するとその人物は空中で停滞し、真っ直ぐとFWメンバーを見下げる。

「戦場で油断するなどは…甘いな。これでFWとは…笑わせる」
ガンブレードを肩に乗せ、笑いを浮かべているのは

「そのような腕ではこの『魔王』を倒すことなど出来んぞ？」

『魔王』だった。

「『魔王』？……ふざけてるんですか！？」

「そう思いたければそう思うがいい。名前など無意味なのだからな」

「！！……あなたは今自分が何をやったのかわかってるんですか！？」

「…ふふ」

ティアナの問いに魔王は笑うだけ。

「公務執行妨害……ふん、重罪だったかな？」

「わかってるのなら…！！」

「しかしそれがどうした？ 私はお前の仲間を攻撃したのだぞ？
そして私は武器を捨てず、お前達の前にいる……これが何を意味するかわかるか？」

「!!……あんだ……!!」

『魔王』は口元を上げながら八汰烏をティアナに向ける。
そして

「わからないのなら教えてやる。こういう意味だ」

銃口に黒い光が収束し

「カラムיתי・ショット」

八汰烏の声を合図に発射される。

「っ!!……!! 皆、下がって!!」

その弾はドンツと。

「な……」

ティアナが避けた後の場所に大きく穴を開けた。

「散弾っ!? ……く、まずなのはさんに連絡しないと……」

「さあ、遊ぶがいい、私の攻撃を避け続けろ」

次々と弾を発射する『魔王』の攻撃をティアナは走りながら避け、素早く念話でなのはに救助を求めた。

「ティア！、どうする！！？」

迫り来る弾丸を何とか避け続けながら、スバルはティアナに聞いた。

「すぐこっちに来てくれるって…それまで持ちこたえるのよ！！」

「わかった！！」

スバル達はその指示に従い、回避に専念することにした。

「はははははッ！！！！どうしたどうした？」

だがFWメンバーに淡々と攻撃を続ける『魔王』

「くっ……攻撃ができない……！！！！」

FWメンバーには飛行できる人物はいない。

スバルのウイングロードも、常に高速で走り続けているリニアールの上では発動しても意味はない。

発動にさえ魔力がいるのに、リニアールに追いつくにも結構な魔力がいるためだ。

「くそ…最初にフリードを狙ったのはこのためか……」

「大丈夫？フリード？」

「キュ」

エリオもキャロも、フリードが戦闘不能となった今では何の役にも立てない。

ただ攻撃を続ける魔王を見ているだけしかできない。

「はあああッ!!」

「ふふ…闇雲に撃っても当たらんぞ?」

「くっ…」

唯一頼みのガンナーであるティアナだが、地上より空中の方が有利のため難なく攻撃は避けられる。

「こうなったら…クロスファイアー…!!」

「遅いッ!!! カラミティ……」

攻撃を遮るように魔王は八汰烏をティアナに向ける。
再び銃口に黒い光が収束する。

「ッ!!」

「ショット!!」

「(やば…避けれない…)」

発射され、迫り来る無数の弾
その弾は真っ直ぐ自分に向かってくる

「（今からじゃ反応できない…）」

ティアナは自分に来るそれがゆっくりと、スローモーションに見えた。

「――ッ！！！」

向こうでスバルが大声で何かを叫んでいるがそんなこともティアナの耳には届いていない。

迫り来る弾…あと2m…1m

「（お兄ちゃんの夢…叶えられなかった）」

あと30cm…もう鼻の先まで来た。この弾は自分の顔を抉り、肉を飛び散らすだろう。

「（ごめんなさい…お兄ちゃん…スバル…なのはさん）」

死を覚悟した

ティアナはゆっくりと目を瞑る。

せめて楽に死ねるよう…そう思った瞬間

「デイベンバスターーッ!!!!!!!!!!!!!!」

向かっていたその弾は、ティアナに当たることなく消えていった。
桃色の、砲撃によって。

「…………え？」

ティアナは自分の身に何が起こったのかわからなかった。
目を開ける。

「……………」

見えるのは遠くを見て笑みを浮かべている『魔王』の姿と

その遠くにいる白いバリアジャケットを着た女性。

「…………私の大切な教え子がずいぶんお世話になったみたいだね」

ゆっくりと、焦らずその女性は魔王に近づく。

「そうでもないさ…なかなか楽しめたからな」

「…………『ここがあつたが百年目』…って言うのかな、こういう時は」

「実際には8年だがな…………ふん、『教え子』とは…教導士にでもなつたのか？」

まるで友達感覚で二人は喋っている。

「うん、そうだよ。…………あの時から私は考えたんだ…自分があんな事をしたから、あんな結果になっちゃったんだって。

だから私は、それを他の人が間違わないように、皆に教える事にしたんだ」

その言葉に『魔王』は、女性を仮面の奥の瞳で冷ややかに見つめる。

「…………お前のような、一見優しいようにでいて、

実は何も考えていないだけの人間を何とか知っているか？…………

『坊や』さ」

「…なるほどね、『坊や』…………か」

その女性は『魔王』の言葉に納得したのかふふっと笑う。

「何も考えてないわけじゃないよ。ちゃんと私は考えているから」

「どうだろうな？」

「信じなくてもいいよ……今さらだけど……一応本人確認ね」

女性はその手に持っている杖を魔王に向ける。

「…ふふふ」

魔王も同じく、八汰鳥の銃口をその人物に向け、ゆっくりと口を開く。

「…お前だな？」

「あなたなんだね…？」

「私が…『魔王』だ」

「わたしが…

『高町なのは』だよッ!」

8年ぶりの再会、お互いに光を発しながら、
『高町なのは』と『魔

七奏目（後書き）

へああ「スター○ックもほしい」

伸二「買えばいいじゃない」

八奏目（前書き）

最近あかべえそふとつうにはまっています。

というわけで車輪の国、買っちゃいましたW。

というわけでまた新たに小説、作ります。

もちろん元ネタは車輪の国で！！

よろしければ見ていってください

八奏目

「うん……うん、わかったよ、今すぐにいくから待ってね」

空中で一通りのガジェットを撃墜した後、高町なのはとある人物から念話を受けていた。

「なのは？誰からだったの？」

念話を終わると、なのははふうっとため息をつき、フェイトのほうを向く。

「フェイトちゃん……落ち着いて聞いてね」

「な、なに？」

真剣な眼差しにフェイトは動揺を隠せなかった。

まさかエリオ達が！？

皆は無事なんだろうか！？

今から助けにいかなきゃ！！

そんな考えが何度も頭を過ぎる。

「さっきの念話はティアナからだね…」

そんなフェイトに、なのはは冷静に真剣に、言った。

「……………『魔王』が…現れたらしいよ」

「……………」

「くっ!!!!!!!!!!!!!!」

「ッ!、フェイトちゃん!、落ち着いて!」

真っ先に現場に向かおうとしたフェイトをなのはが腕を掴んで止める。

「話してなのは!、あいつが……『魔王』がエリオ達に……!!
!!!!!!」

「わかってるよ!!……でも、真正面から行くわけにはいかないで
しょ……!!?」

まず落ち着こう? はい、深呼吸」

「ッ……すう……はあ」

なのはの言うとおりに深呼吸をし、なんとかフェイトを落ち着かせ
ることに成功したなのは。

「エリオ達のが心配なのは分かるけど……ここは慎重に行かなきゃ……
まず、フェイトちゃんは裏から回ってくれる?」

「え?.....どういう...こと?」

「8年たって、私達も強くなったけど.....相手はあの『魔王』だよ。
何が起るかわからない:」

「.....」

「だから.....ここは奇襲をかけるよ」

宿敵が現れたというのに、なのは笑っていた。

「じゃあ、作戦を言うね」

「.....うん」

なのはの言うことをフェイトは黙って聞いていた。

.....

「カラムィティ ショット災難の弾ッ!!」

「レイジングハートッ!!」

「Protection」

バチツと音を発て、『魔王』の撃つ魔法弾をなのはは懸命に防御する。

「ぐう…………ッ!!」

「くくく…………避けてもいいのだぞ？」

「そんなこと……………しないッ!!」

最初の衝突から約10分がたつが、なのはは防戦一方だった。

「ティアナ達は…………これ以上傷つけさせない!!」

今なのはの後ろにはティアナ達がいるのだ。

もし自分が避ければ攻撃がFWメンバーに当たってしまう。

さらにFW四人は先ほどの戦闘でもう魔力が限界に近く、この場から逃げることもできない。

まさに『魔王』にとっては絶好的なのだ。

『魔王』はそれを狙い、なのはを狙わずわざとFWメンバーを狙っ

ているのだった。

「なのは……………さん!!」

ふるえる膝をなんとか支え、スバルは立ってなのはを見た。

「あたし達も……………戦います!!」

「ッ!!、来ちゃだめッ!! スバル!!」

よろよろと近づくスバルを見てなのはが声を荒げるが、もう遅かった。

「いいだろう」

気が付くと『魔王』はなのはの前から消え、スバルの後ろで笑みを浮かべていた。

「ッ!!」

「おっと」

スバルが振り向く前に、『魔王』はスバルの首を掴む。

「がッ……………!!」

「ふふふ……………さあどうした? 私と戦いたいのだろう?」

「あ……………あ……………あ」

ミシミシと音を立て、スバルのつま先が地面から離れる。

『魔王』は今、片手でスバルを持ち上げていた。

「スバルッ!!」

「「スバルさんッ!!」」

「貴様達は動くな……この女の首が無くなってもいいのか？」

「!!………が………があああ!!」

咄嗟に助けようと動いたティアナ達を見て『魔王』はさらにその腕に力を込めた。

「スバル!!……くっ………」

「ふふふ………いい表情だ」

歩めていた足を止め、悔やんでいるFWメンバーを見ながら『魔王』は笑う。

「憤怒、憎悪、責任感………そんな感情が手に取るようにわかる………なかなか面白い………フンッ」

「ッ!？」

『魔王』はティアナ達に向けてスバルを投げ飛ばした。
ドサッを音を立て、スバルは倒れ込む。

「スバルッ………大丈夫!？」

「……………」

「ッ！……スバル！？……返事なさいよ！！ねえ！！」

すぐにティアナが駆けつけ、スバルの安否を確認した。

しかしいつまでたっても返答がないので、ティアナは焦っていた。

「気絶しているだけだ。そいつは惜しい人材だから……殺すわけがないだろう？」

まるで人間を物としか扱っていないような声で言ったあと、ふと考え込む仕草をする。

「いや……その女の場合……『壊すわけがない』……のほうが正しいかな？」

「ッ！……黙りなさい！！」

「……………ふん」

瞬時にクロスミラージュを構えると、『魔王』はそれ以上は言わずなのはのほうを向く。

「さあ……口だけの者は黙らした……高町なのは」

ガシャンツと。

八汰烏をなのはに向けると鈍い音がたち、リボルバーが回転、カードリッジがロードされた。

「……………」

なのはも無言でレイジングハートを構える。

「……………続きを始めようか？」

黒色ではなく、今後は緑色の光が銃口に収束する。

そして水平に、円を描くように勢いよく八汰烏に振り回すと『魔王』の周りに無数の魔力弾が形成された。

「うそ……………こんなに沢山……………!!」

その弾の量になのは達は驚きを隠せなかった。

そして魔王は告げた。

『カラミナイ災難』は終わり、『フオビドウン禁断』の音を奏でるために。

「人間というのはおもしろい……………少しでも心に傷を作ってやると、その傷を癒すために傷つけた人間を追ってくる……………」

しかし……………追ってくるだけではだめだ。それに対抗する力を付けなければいけないのだ」

「……………？」

いきなり意味不明な言葉を言っている『魔王』をなのは達は達は警戒しながら見る。

八奏目（後書き）

なかかなか話すすまんな・・・

主人公いつでるのやら

九奏目（前書き）

おまたせしました・・・といってもあまり見てくださる方はいませんけど（涙）

今回は、おそらく一番時間をかけたと思います。

まあ駄文なんですが。

しかし普段からこのくらいの時間をかけるとなると・・・うわ、やばい

九奏目

「ハハハハハハッ!!」

「くっ……」

リニアレールから少し離れた鉱山、『魔王』となのはは線路に沿うように空を飛んでいた。

「右? ……左? ……違う、前!!」

次々と迫るスフィアを、なのはは必死に避け続ける。

これに当たってしまったてはまずいと、長いところ管理局にいた彼女に体がそう思わせたのかもしれない。

事実、『魔王』の放ったスフィア、『フォビドゥン・ショット』の弾は、普通の弾と軌道がまったく違っていた。

普通のスフィア……例を挙げるとしたらなのは『アクセル・シューター』やフェイトの『フォトン・ランサー』だが、これらの魔法には全て長所があり、短所がある。

『アクセル・シューター』はコントロール性、威力に優れるかわりに速度があまりない。

『フォトンランサー』は速度、不意打ちなどに優れる変わりに直線にしか進まず、避けられやすい。

これはなのはとフェイトの得意、不得意なども関係しているのだが、ほとんどの攻撃誘導弾はこの二つに分かれる。

「何なの・・・この動き・・・!!??」

だが『魔王』のスフィアは違った。

「ふふ・・・さあ足掻け」

『魔王』はシュツと腕を横に振った。すると三つのスフィアがなのは目掛けて飛んでいく。

その動きはなのはのアクセルシューターのような柔軟な動きでもなくフェイトのフォトンランサーのような直線上の動きでもなく

真っ直ぐ進んだと思えばその場で90度曲がり、再び目標に向かうスフィア。

そう、例えるなら『ジグザク』

そのような言葉でしか表現することはできないだろう。

まっすぐでもなく曲線でもなく、カクカクと、「く」の字を描きながらスフィアはなのはを追いかける。

「避けることを私は許さない・・・ならばどうする？」

いくら天性の才能を持つなはでも、避けたところで、スフィアはその場で停止、そしてなのはに向かって再び追いかける。

ならばどうするか？簡単だ。

「避けられないなら・・・守るまでだよ！！レイジングハート！！」

「プロテクション」

なのはは振り返り、自身に全身を覆う球体型のシールドを発生させる。

すると無数のスフィアはシールドに当たり、あっけなくポンツと音を立てていくつも消滅してしまった。

「よし・・・」

それを予想していたのか、その光景を見たなのはは口元を上げる。

「やっぱりだね」

「ふむ? ・ ・ 何かわかったか?」

なにかに確信に至ったなのはの表情を『魔王』は首を傾げ、節々と見つめる。

「いくら貴方が膨大な魔力を持っていようとこんな数のスフィアを一気に操るなんてできっこない。

たぶん今周りに浮かんでいるスフィアはフェイク、本当はこの中から3 ・ ・ 最高でも5つしかコントロールは出来なかったはず!」

さらにあれだけの量、一つ一つに入れている魔力はさほど多くはない ・ ・ ・

だからシールドにぶつかった程度の衝撃で壊れちゃう。

・ ・ ・ あなたの攻撃、全て見切ったよ! 今度はこっちの番!」

瞬時にシールドを解除、アクセル・シューターを『魔王』目掛けて放つ

「シュートッ!」

「ほ ・ ・ ・ ・ ・ ・」

だが『魔王』も反応は早かった。
アクセル・シューターを紙一重でどんどんかわしていき、後ろに後退していく。
当たればそれだけでもダメージを受けると言うのに、『魔王』は笑っていた。
自分の技を見極められたというのに、とても面白そうな表情をしている。

それは子供がおもちゃを見つけたような、そんな無邪気な笑顔ではなく、
逆・・・大人がおもちゃを壊す、そんな笑顔で。

「面白い推理だ。教導士ではなく探偵にでもなったらどうだ？・・・
はあ！！！」

迫り来るなのはアクセル・シューターを八汰鳥で一閃。

「ふんっ！」

後ろから飛んでくる弾をショットで相殺。

『魔王』はまるで攻撃してくるのを知ってたかのような対応の良さで、次々とスフィアを落としていく。
だがそんな事で怯えるのではない。
即座に数発またスフィアを作成、『魔王』の後ろに回り込ませる。

「遠慮しておくよ！・・・シューター・・・！！行って！」

狙いは『魔王』の首筋の後ろ。

内蔵に強いショックを受けると人間は気絶する。なのでピンポイントで首筋にスフィアを当て、『魔王』を行動不能状態にする。それがなのはの思惑だった。

なのはの狙いどおりスフィアは『魔王』の首筋に向かっており、さらに今『魔王』は後ろを向いている。

今この場から振り返って撃ち落とす時間はない。

「もらったよ！」

なのはは勝利を確信した。

このままいけばスフィアは確実に『魔王』に当たり、戦闘不能まで持ち込むことができる。

しかし『魔王』の首筋にスフィアが当たる寸前

「ふん」

突如上から緑の弾が高速で落下。なのはスフィアを撃ち貫いた。

「なっ!!・・・どうして!?!」

撃ち貫いたスフィアは『魔王』の放ったフォビドゥンショットの弾だった。

その弾は目標を破壊した後、まるで意思があるかのように『魔王』の周りをクルクル飛んでいる。

「先ほどのお前の推理・・・なかなかのものだった、本当にな・・・」

まさかこんな上手く引かかってくれるとはおもわなかったぞ?」

八汰烏を横にゆっくり振る。すると再び空間に無数の弾が作成された。

「!!まさか、今までののは全て!?!」

「そう・・・全て『遊び』だ」

『遊び』

それは『魔王』がなのはにしていた事。

簡単に言うとは手加減だ。

そう、『魔王』は初めからなのはと真剣に戦うつもりなどなかったのだ。

信じられないという顔をしているのはを見ながら『魔王』は淡々と語る。

「俺はあえてスフィアを三つしか動かさず、お前を狙った。そしてシールドに当たると同時にスフィアを解除。端から見れば、お前に当たって消えたように見えたであろうな？」

「そんな・・・嘘・・・うッ!!」

「嘘ではないことがわかったか？」

「!!・・・く・・・」

急に来た足の痛み。見ると脚の装甲が少し焦げていた。

『魔王』はあの一瞬でなのはの足に向けて弾を放ったのだ。

コントロール性、速度、威力、どれもずば抜けて高いスフィアがまだ何十個もあることになのはの顔が少し強ばる。

「残念だ・・・八年の月日を経ても私の『遊び』につき合えないとは・・・失望したぞ、高町なのは」

「・・・・・・・・・・？」

「これでは貴様を助けた意味がない・・・あの場で止めトドを指しておくべきだった」

「・・・・・・・・え？・・・どういう・・・こと？」

困惑の表情をするのはを見て『魔王』はため息をつく。

「忘れてしまったか？8年前の事を・・・」

「・・・・・・・・・・」

8年前・・・おそらく『魔王』はなのは戦った時の事を言っているのだろう。

それ以外なのはには思い当たるフシはなかった。

「あの時のこと・・・・・・・・・・」

『魔王』は仕掛けてくる様子もなくなのはを見ている。どうやら思い出すのを待っているようだ。
なのはは眼を瞑り、あの日の事を頭の中で思い出す。

「・・・ん・・・」

初めての出来事、そして二度目の敗北を味わった。

一度目はP・T事件でのフェイトとの戦闘。

その時はフェイトに見逃されなんとか助かった。

だが『魔王』との勝負はあの時のような情けをかけられた敗北とは180度違うだろう。

いや、敗北では生ぬるい。もっと強く、もっと屈辱な負けを表した言葉がある。

それは『惨敗』

「・・・」

まったく歯が立たなかった相手。初めて見る大量の自分の血。

なのはの頭の中であの出来事が再生される。

『魔王』は自分を助けた。

そう彼は言っている。

助けたということはあの場面、自分が『魔王』に名前を聞いた時く

らいだろう。

あの後すぐに自分は気を失ってしまったため良く覚えてはいないが、なにか引つかかる。

「・・・・・・・・・・」

うつすらと眼を開け、『魔王』を見る。

当の本人はあの時と同じく、デバイスのカードリッジをリロードしている。

次々と落ちるカードリッジの葉莢。

・・・・・・・・落ちる？

人間は意識を失った直前ならまだ感覚が残っているらしい。

そういえばあの時、妙な感覚が体を刺激した気がする。一点に刺激、次々と飛び散った何か。

飛び散る・・・助けたとは言っていたが魔法ではなかった？
ならば物質。一般的な薬や注射などそのような類だろうか？

しかしあの時は自分に何かが落ちてきた。

飛び散る何か・・・落ちるということは物質・・・

「・・・・・・・・!!」

あった。

葉の類と思われる物、そして飛び散る物。

そうだ、思い出してきた。あの冷たい感触、ツーンと来た匂い。

「液体!!」

それしかないだろう。

当たったのか、『魔王』はリロードを終えるとふふっと笑う。

「そうだよ・・・思い出した・・・あの時あなたは私に何かをかけた・・・」

「ご名答・・・よくぞ覚えていたな。

感謝するがいい。お前が再び空を飛べるのは私のお陰なのだからな」

「そうだよ、おかしいとは思ってた・・・あの時自分でもわかるくらい私は重傷だった・・・」

でも私は助かった・・・誰かが私を見つけてくれたらしいけど、聞いてみたら私が病院で治療を受けるまで約10分時間が経っているって。

おかしいよね・・・あんな傷で10分も氷点下の中いたのに、なんも傷害なく回復したんだから」

普通なら死んでもおかしくはない。いや、100%死ぬはずなのだ。

「そうだな・逆になぜ今までその答えを導かなかったのか、私はそれが疑問だな」

「…………お礼を、言いたかったんだ」

「む？」

予想外な返答に『魔王』は少し驚く。

「こんな私を助けてくれた・私を見つけてくれた、その人に、お礼を言いたかったんだ
なんで助かったのかは疑問だったけど、それより助けてくれた人にお礼を言うのが先かなって思ったんだ」

「……………ふうん」

「あなたがどんな薬を使ったのかは気になるけど…………それより大事なことだから」

こういう人物なのだ。

高町なのはという人物はこういう人なのだ。

自分より他人を重んじる。その理由がどんなに小さくても、彼女は感謝の気持ちを忘れない。

『魔王』は黙ってなのはの話を聞いていたが、どうでもいいのか真面目には聞いている様子はない。

しかしなのはの次の一言で『魔王』は驚愕した。

「だから・・・あなたにもお礼を言うね？」

「・・・なに？」

何を言っているこの女？と、『魔王』は思った。

自分を殺そうとした人物にお礼を言うなんて前代未聞、世界初ではないだろうか？

「多分あなたは・・・とても優しい人・・・だから私を助けたんだよね？」

「何を馬鹿なことを言っている？」

私はただお前が遊び道具になるかを楽しみにしていただけだ」

「違うよ」

もったもな理由を一言で否定し、さっきとは違いやさしい笑顔で『魔王』に微笑みかける。

「そんな理由であなたは私を助けたわけじゃない。だって、あなたは・・・」

「カラミティショット」

『魔王』は痺れを切らしたのか、なのはが言い終わる前に散開する弾をなのはに向けて放つ。

「っ!!」

即座になのはは上へ回避、態勢を整える。
後ろを振り返ると、その散弾が当たったのか、岩には大きなクレ―ターのような物が出来上がっていた。

「撤回しよう、探偵ではなく、詐欺師にでもなったらどうだ？
そのような根拠のない事がよく言えるものだ。

それを言うのはこの口か？ならばその口から向こうの風景を見えるようにしてやろう」

八汰烏を水平に構え、『魔王』は冷静な声で言う。

「お喋りは終わりだ……どうやらお前を助けたのは間違いだったようだな。

今度は……ちゃんと殺してやろう……」

「そうやって自分を偽っちゃあだめだよ……いいよ!! あなたがそう来るのなら、私も本気でいかせてもらうから!!」

ブンツといい音を立て、杖先を『魔王』に向けてなのは言った。

「手加減はしないぞ?……フォビドゥン・ショット!!」

縦に八汰烏を回し、10発のスフィアを作成、自分の周りに停滞させる。

「させないよ!!……アクセル・シューター!!」

だがいち早くその技を察知したなのははすぐさまアクセル・シューターを『魔王』に発射する。

するとスフィアは『魔王』を守るようになるのはのスフィアとぶつかり、消えていった。

気絶から眼を覚ましたスバル、そしてティアナ、エリオ、キャロは呆然としていた。

いきなり目の前に現れた強敵、『魔王』

さらに『魔王』を昔から知っているかのような口調だった自分たちの隊長。

挙げ句の果てに二人はそのままどこかへ飛んで消えていった。

FWといえど初任務でこれほどの事態があればさすがに混乱する。

「どうしようティアナさん？」

「……わかんないわよ」

レリックはどこかへ行ってしまう、自分達の周りにガジェットはない。

だが任務は終わっていないようだ。

なのでエリオの問いに今の現状に対する対応をティアナがわかるはずがなかった。

「……みんな、大丈夫？」

と、そこに今まで姿が見えなかったフェイトが現れる。

「フェイトさん!!今までどこにいたんですか!?!」

そういえばなのはとフェイトは一緒にいたはずだ。

なのに『魔王』が現れてからこちらに来たのはなのは一人。
一体この人は今まで何をしていたのか?

ティアナはその事を問いたですと、フェイトの表情が急に強ばる。
その眼差しにFWメンバーは初めて恐怖を抱いた。

「私は・・・何もしていなかったよ。

なのはが『魔王』と戦っている間、ずっとあそこの岩場に隠れていたんだ」

「え・・・?」

向こうを指さし、場所を教えるフェイトだったが、ティアナ達はそんな事どうでもよかった。

今この人は何と言った?

「隠れていたって・・・どういふことですか!?!」

まさか『魔王』と戦うのが怖くて怖じ気づいたんですか!?!」

「・・・・・・・・・・」

フェイトは眼を瞑り、そして真正面からティアナ達に言った。

「ずっと見てたんだよ・・・なのはとの約束でね」

「ケホッ・・・な、なのはさんの・・・？」

よろよろと立ち、首を押さえながらもスバルは言う。

おそらく意味がよく分かっているのだろう。

フェイトは、こんな言葉だけでは理解するのは難しいと判断したのか、なのはの飛んでいった方角を少し見る。

「・・・・・・・・そろそろヴァイスさんがくる時間だね・・・もうすぐヘリがくるはず・・・」

じゃあ納得できないと思うから、早く伝えるね」

「あ、はい」

「・・・・・・・・実はねー」

・・・・・・・・・・・・・・・・

（30分前）

「作戦を伝えるね、フェイトちゃん」

「・・・うん！」

『魔王』を倒すための作戦。

フェイトはなのはの言葉を一言も聞きそびれまいと、集中して聞く事にした。

8年前の屈辱、手加減され、遊ばれたあの日の出来事。

『魔王』聞きたいことは山ほどある。

そのため今は自分の親友の作戦を信じることにした。

どんな作戦か

それは勝率が高いのか？

危ないことではないだろうか？

（多分なのはも『魔王』には勝てない・・・なら私達二人で・・・）

どんな作戦だろうと、自分となのは一緒に行くとフェイトは考えていた。

だがなのはから発せられた作戦は思いもよらないものだった。

「まず・・・魔王と戦うのは私一人がいい」

「・・・え？」

聞き違ったのだろうか？

なのはは一人で『魔王』と戦うと言った。

それはつまり・・・死？

「!?!? どういうこと!?!? なのは!」

納得するはずがなく、当然のようにフェイトはなのはに聞いたです。

「落ち着いてフェイトちゃん」

しかし息が荒くなっているフェイトとは違い、なのはは冷静だった。なぜここまで冷静でいられるのだろうか？フェイトにはわからなかった。

「フェイトちゃんも知っているはずだよ、魔王の手強さを」

「っ!・・・・・・でも!」

「しかも私達ならまだしも、今は新人達もいる・・・

ここは一回分かれて、FWメンバーを安全に帰す・・・それが第一優先だよ。

違うかな？」

「・・・あ」

そうだ、今この場にはエリオ達もいるのだ。

自分達ならまだしも、飛べない彼女達にまで被害がでるかもしれない。

それは隊長という身分でも、人としてもあってはならぬことだ。

「・・・そうだよね・・・ごめん、『魔王』の事になると私、つい熱くなっちゃうから」

危うく自分はまた間違えるところであった。

フェイトが理解したことになるのはは安心し、説明を続けることにした。

「続けるよ?・・・今から私が魔王を引きつけるから・・・その間にフェイトちゃんはみんなを逃がしてあげてね」

「・・・」

わかっている。わかっているが、やはり心配なのだ。

8年の月日が経とうにも、なのはは一度『魔王』に負けているから。たしかになのはの腕は上がっている。撃墜されてからも必死にリハビリをし、どんな人でも守れる力を入れた。

人を救うことのできる、大きな力を手に入れたのだ。

しかし、それは『魔王』も一緒。

自分達は強くなったが、それは『魔王』も一緒なのではないか？

もしかしたら自分達以上に力をつけているかもしれない。

もしそうならどうする？

なのはは無事ですむだろうか？

「……だ、だいじょうぶかなでも相手は『魔王』だし強いしでもそれは私達もだけどいやそんなんじゃないよ今ではエリオ達を守ることを考えないといけないしああでもどうしよ」

「……ふえいとちゃん……（汗）」

オロオロとオロオロと、その歳に似合わない挙動不審だ

……この執務官、自分では強くなっていると思っっているようだが、見ての通りさつきからネガティブにしか物事を考えない。

下へ下へと思考が下がる。昔からフェイトの精神の脆さは折り紙つきだったが、今の姿を見る限りもっと弱くなっているのかもしれない。

しかしそんな事はなのも昔から知っている。

だから自分の身を案じてくれる親友に、やさしく微笑んだ。

「大丈夫だよ！フェイトちゃん！！・・・私はここで終わるつもりはないから！」

「・・・っ」

輝かしい眼差しでフェイトを見る。

たったそれだけの行動で、弱かった彼女の瞳は真剣さを取り戻す。フェイトは決心したなのは眼を見て、説得するのを諦めた。

「・・・わかったよ・・・でも、絶対・・・絶対無理はしないでね！！」

みんなを安全なところに逃がしたら、私もすぐ行くから！」

「うん、ありがとう」

二人はしばらく見つめ合った。

お互いやるべきことがある。レリックの任務なんてもうどうでもよかった。

今は目の前の出来事を対処するのが先と思っているからだ。

「じゃあ、いってくるよ」

「・・・うん」

フェイト背を向け、なのはは向かった。

大事な教え子を守るために、そして、8年前の決着をつけるために。

「・・・・・・・・・・」

フェイトはなのはが点になり、見えなくなるまで見ていたが、最後までなのはは振り返ることはなかった。

少し寂しい気分にもなりつつも、自分の使命を頭の中で何度も考える。

「大丈夫、大丈夫だよ、フェイト・テストロッサ・ハラオウン・・・」

なのはは自分を信頼して、自分達の教え子を守るよう託してくれた。ならば・・・この期待には答えなければ。

かすり傷一つ負わせない。無事に、安全に皆を助ける。

フェイトは一步、進んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なのはさん・・・そ、そこまで僕達のことを・・・」

「なのはは・・・いや、私もそうだけど、皆の事が一番心配なんだ。だから・・・わかるよね？」

「「「「・・・はいっ!!」「」」」」

一通りの説明を終えると、皆納得してくれたようだった。スバルに至っては泣いている。無論嬉し涙だが。

そんな微笑ましい光景を見ながら、フェイトはヴァイスに指示を出す。

「・・・・ヴァイスさん、後はよろしくお願いしますね」

運転席にいるヴァイスがそれに答える。

「あいよ、任せてください!んじゃ、もう出していいっすかね?」

「・・・・・・・・」

フェイトは一回辺りを見回す。
ガジェットの様子は、もう大丈夫だろう。

「ええ、いいですよ」

「じゃ、出しますよ!!」

確認を取った後、ヘリは少しずつ上昇していく。

「「・・・・・・・・」「」」

どんどん閉まっていくドアの向こうで、FWメンバーは皆フェイトを見ている。

おそらく自分達が心配していると同時に彼女らも自分達の事が心配なのだろう

「必ず帰ってくるよ・・・その時に『魔王』についても教える。
だから・・・心配しないでね」

「・・・・・・・・!!・・フェイトさー」

ボタンと。

最後、キャロが何かを訴えていたが、それは閉じたドアによって遮られた。

「・・・・・・・・大丈夫だよキャロ・・・・・・・・心配しないで」

F Wを乗せたヘリは着々と上昇し、そして機動六課の隊舎へと向かっていった。

これでもう大丈夫だろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイトはだんだん小さくなっていくヘリを見ながらまた切ない気持ちになった。

もうここには誰もいない。ジャミングがかかっているのか、通信ももう使えない。

ここ一帯にいるのは自分となのは・・・・そして『魔王』

「・・・・・・・・・・・・・・・・すうゝゝゝはああああっ」

大きく深呼吸。

これは熱くならないため・・・あの時みたいに周りが見えなくなっ
てはいけない。

ここからは本気で行かなくてはいけない。

「・・・・・・・・こっちだね」

通信が出来なくとも、フェイトはなのはの居場所がわかった。

友情とか、親しいもの同士の感覚とかではない。

ニュー○イプのようなお互い調和しあっているわけでもない。

ではなぜわかったのか？

簡単なこと。

「なのは・・・待っててね!!」

彼女を表す、桃色の光の柱が見えたからだ。

.....

「はあああああつ！」

「く!? 防御!」

『魔王』は逃げているのはに向かって一気に加速。
そのまま足で蹴り飛ばす。

なのははシールドを張るのが少し遅かったためか衝撃を吸収できず大きく後ろに吹っ飛ぶ。

「まだまだだ・・・」

それに追い討ちをかけるが如く、八汰鳥から連続で弾を発射する。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

大きな爆発が起こり、その衝撃によって岩が崩れ始める。
煙が辺りを覆い、『魔王』の視界を遮る。

無論、なのはの姿も見えなくなった。

「・・・・・・・・ち」

姿の見えない相手というのは厄介だ。

どこから攻撃がくるかもわからない。こうなってしまったら煙が晴れるか、相手から来るのを待つしかない。

しかし『魔王』は頭が切れる。この程度の戦略はお見通しだろう。
さてどうしたものかと、煙が晴れるのを待っていると

「・・・・・・・・っ!」

突如飛んできた砲撃が『魔王』の頬を掠る。

『魔王』は素早くその方角に目を向けるが、そこには誰もいない。

見えるのは砲撃によって空いた煙の穴のみ。

「奇襲か・・・おもしろい」

八汰烏を握る腕に力を込め、どんな攻撃がきても大丈夫のように腰を低くし、八汰烏を水平に構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

しかしいつまで経っても次の攻撃がくることはなかった。

・・・なぜ攻撃してこないのだろうか？

次第に煙はなくなり、薄っすらと景色が見え始める。

「・・・・・・・・・・なに？」

やがて視界は晴れ、岩場が姿を現す。

岩場が。だ。

なのはの姿ではなく。だ。

視界に広がるのは瓦礫と化した岩場のみ。
どこにもなのはの姿はなかった。

「・・・・・・・・どこへいった？」

辺りを見渡すがその姿はどこにもない。もしや逃げた？ そんなわけ
あるまい。
注意深く、警戒しながら周りを見る。

「む？」

と、そこで『魔王』はあることに気付いた。

それは自分の影。

『魔王』は今地面の近くにいます。なので影が映ることは普通なのだが

「・・・・・・・・？」

ズズッと。

自分を映し出す影が次第に大きくなっていく。

さらに色も段々濃くなってきた。

どうということだ？

しばらく『魔王』は不思議な自分の影を見ていたが、そこで重大な事に気付いた。

光というものはその光源が大きければ大きいほどそれを遮る物体の影は大きくなる。

懐中電灯で自分を照らした影と、日光の影での大きさを比較すればわかるだろう。

さらにその光源が近くにあればあるほどその影の濃さは増す。

今『魔王』の立っている場所は人気のない岩場だ。

何も動く物はないし、生物すらない。

よって影は日光によるものだろう。では、その影が大きくなったとしたら？

それは、太陽のほかはどこからか光が発しているということ。

『魔王』の影は濃さを増し、大きくなっている。その光は次第に大きくなっているようだ。

ここまでくればわかるだろう。

つまり。

「上かッ！！！」

バツと真上を見る。

そこにあつたのはとてつもなく大きな桃色の弾。

いままでの光源はこれが原因だったのだ。

その弾を作っている人物は考えた。

どうすれば『魔王』を倒せるかと。

正面から向かえば敵わないのは百も承知。ならばどうするか？

そして短時間で考え付いた戦略。

それはわざと視界を悪くし、一度攻撃を行うことによって『魔王』の注意をそこに促すことだ。

その間に空へ急上昇。気を取られている間に攻撃の機会を伺う。とびつきりでかい砲撃魔法をチャージした状態で。

「今更気付いても遅いよっ!!」

膨大な魔法をチャージした状態で、その人物、『高町なのは』は言った。

半径1mはあるその巨大な弾。

もしこれが発射されれば、いくら『魔王』とてひとたまりもないだろう。

「貴様ッ!!」

予想外の出来事に『魔王』は少し取り乱す。

「8年前のあの頃から・・・私は変わった!!、だから受けてみて
!!」

今の私を!!」

「カードリッジロード」

レイジングハートから4発のカードリッジが吐き出され、それによ
って

杖の先端から4つの羽が生える。

「デイバイイイイインッ!!」

収束した魔力はもう耐えられんとばかりに振動している。

これが今のなのはの成長。

なのはの思いを乗せた魔法は、『魔王』へと向けられる。

「高町 イイイイイイイイイイイイイイイイッ!!!!!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!!!!!」

「バスタァアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そして砲撃は発射された。

希望が絶望を打ち貫かんため。

衝撃破が広がり、何もない荒野には桃色の柱が立った。

九奏目（後書き）

リニアレール編もそろそろ終盤。

いやー長い長い。もう「魔王」さん主人公でいっすw

十奏目（前書き）

この小説は本当に展開が難しい・・・。

あと、この作品の展開で『とある事』にお気づきの方がいらっしやるかもしれませんが、あえて言わせて頂きます。

「それは間違いです」

十奏目

なのは放ったデイベインバスターによって、再び荒野一面に砂埃が舞う。

だが煙で覆われているのは地上だけであって空中にいるなのはには大して視界の邪魔にはなっていない。

空中に浮いたままの状態で、なのはは『魔王』の姿を探した。己が持つ膨大な魔力を消費し、放った攻撃。まともに喰らってれば只では済んでいないはず。

そう、まともに喰らっていれば、だ。

何せ相手はあの『魔王』である。ダメージはあるだろうが、この程度の攻撃でやられるとはなのはも思っていなかった。

幸い今は地上に煙が充満している。もし『魔王』が何らかの攻撃の動きを見ればそれと同時に風で煙も動く。これで『魔王』の動きはわかる。

さらに今自分は地上から、実に400mは離れた場所にいる。この距離を一瞬で詰めることはいくら『魔王』でも無理だろう。

「レイジングハート、『魔王』の反応は？」

視線を下に向けたまま、なのははレイジングハートに聞く。

「申し訳ありませんマスター。ここ一帯にジャミングがかけられているせいかサーチすることができません」

「そっか、ならまだ『魔王』はここにいてることだね」

ジャミングがかかっているということは『魔王』のデバイスがまだ活動中ということ。

つまりまだ『魔王』はここ一帯のどこかにいると、なのはは考えた。

「なのは！」

「あ、フェイトちゃん」

と、そこにフェイトが駆けつけた。なのははフェイトに気づき、軽く微笑む。

「フェイトちゃん、スバル達は大丈夫？」

「うん、なのはの言うとおり、安全に六課に帰還させたよ」

「そう・・・よかった」

フェイトからFWメンバーの安全が確保された報告を聞き、なのは安堵の息を漏らす。

心配事はなくなったためである。

「ふふ・・・それでなのは、『魔王』はどうなったの？」

部下を心配していたなのはフェイトはにこやかに見ていたが、すぐさま気を引き締めなおす。

「わからない、煙が晴ればわかるはずだけど・・・・・・・・え？」

二人は地上を見つめていたが、そこでなのはとある疑問を抱いた。なのは最後の攻撃から、時間はすでに10分ほど経過している。なのに地上の煙は一向に晴れる気配がないのだ。

これはいくらなんでもおかしい。

なのはが砲撃をしたからといって、10分以上掛かっても晴れないほど煙が舞ったとは思えない。

ならばこの現象は一体何なのか？・・・・・・・・まさかっ!？

「どうしたの？なのは？」

「まさか・・・ねえ、フェイトちゃ・・・」

なのはがフェイトに視線を向けた、その瞬間、

「っ!!、フェイトちゃん!下がってッ!!!!」

なのは見た。

「え?」

フェイトの後ろで

「遅い」

八汰烏の銃口をフェイトに向ける

「危ない！！」

『魔王』姿を。

.....

「・・・ッ！！！！・・・・・・ッ！！！！・・・・・・！！！！」

何やら廊下でドタバタ声が聞こえる。

「一等空尉」とか「至急」とかよくわからない単語が嫌でも俺の耳に入ってきた。

寒気を押さえるために毛布を頭まで被るが、大して温かくはならない。

「大将、そろそろ起きようぜ、何かやばいことになってるらしいよ？」

「ん・・・んあ？」

いやいやながら薄っすら目を開けると机の上でアッシュが光を放っているのが目に入った。

体を起こして目を擦り、周りを見る。ここどこだ？

「何寝ぼけてんだよ、ここは機動六課、んでもってここは大将の自室だよ」

あれ？・・・・・・・・・・ああ、そうか、俺確か部屋にいつて寝ようとしたんだっけ。

「ふあああああああッ・・・・・・・・・・はあっ」

軽く背伸びをして首を鳴らす。んー、なんか妙に体が痛てえなあ。筋肉痛か？

っーかさみい。

見ると窓が全開の状態だった。なんで全開の状態で俺寝てたんだ？

「のん気にボーっとしてる場合じゃないって」

「んあ？」

どうやら俺が寝ている間に何か起きたらしい。ロストログアでも見つけたのだろうか？

なんにせよ、このままここでじっとしている場合じゃないと感じた俺は立ち上り、アッシュを腰につけて部屋を出た。

外に出ると局内は非常に慌しかった。常に局員が書類を持ちながら走り回っている。

そんな中俺は見知った人物がいたので聞いてみることにした。

「なあシャリオさん、なんか騒がしいですが、何かあったんですか？」

するとシャリオさんは驚きの表情で俺を見た。

「雨宮さん！？今までどこにいたんですか！

こんな時にどこにもいないものだから部隊長が怒ってましたよ！？」

「ん？ああ、すみません、少し眠たかったから自室で仮眠とってたんですけど・・・

それで、何かあったんですか？」

「何かあったじゃありません！！大変なんですよ！！高町一等空尉が、高町一等空尉が！！」

「？・・・その人がどうかしたんですか？」

高町一等空尉・・・あの時データで見た女性だったな。

たしか9歳のころからAAAランクほどの魔力を持っていたとか。

俺の質問にシャリオさんは涙目で言った。

「何者かにやられて撃墜されたんですッ！！」

「・・・・・・・・・・なんですか？」

「（なるほどねえ、S＋クラスの局員がやられたとあっちゃあこんな騒ぐしくもなるか）」

アッシュの言うとおり、S＋レベルの人間を倒すなんて普通の魔導師にはできないことだ。

普通の魔導師は俺みたいにランクがC程度で、Sを超える魔導師はそうはいない。

「詳しいことは八神部隊長に聞いてください！！それでは急いでいるので失礼します！！」

「あ、はい、わかりました」

そう言ってシャリオさんは走ってどこかへ行ってしまった。

しかしややこしいことになってるな。

俺は詳しい状況を知るため部隊長室に急いだ。

•

部隊長室の前まで来た。なにやら話し声が聞こえるあたり、話し合
いでもしているのだろうか？

俺はドアを軽くノックする。

「失礼します、ロングアーチの雨宮伸二三等陸士です」

「はいり」

今朝とは違って八神部隊長のドスの効いた低い声の中から聞こえ、それに少し恐怖を感じながらも俺は中に入っていた。

（うお、なんだこの空気）

中に入った瞬間その場に居る人物全員から視線を受けた。

そこにいたのはシグナムさんに部隊長はもちろんのこと、どこかで見たような小学生くらいの赤髪の少女？、ファイルで見たFWメン

バーに、青い狼と短い金髪の女性、ザファイラさんにシャルさんだったっけ

そして隅っこで俯いているこれまた長い金髪の綺麗な人。この人もファイルで見た。フェイト執務官だったかな。

「ッ！！！」

俺が部屋に入ると同時にちっこい赤髪少女が驚きの表情をした。
なんだ？俺の顔に何かついてんのか？

だがその少女？は俺から目を逸らし、なにやら気まずそうに俯きはじめた。

え、何これ？

そんな感じで誰も言葉を発さないまま、10秒くらいたたただろうか
部隊長が口を開いた。

「なあ雨宮君」

「は、はい！」

我ながら間抜けは返事だと思う。普段優しそうな人がこんな声を出すとは思わなかった。

八神部隊長は視線を俺には向けず言葉を続ける。

「今、どんな状況が起きてるか知っとるか？」

状況というのはもちろん高町一等空尉が撃墜されたことだろう。そのことを話すと部隊長は頷いて言った。

「これでなのはちゃんが落とされたのは二度目や……それで丁度今その犯人の話をしとったんやけど……」

「（二度目？）……っと、そうでしたか、ではまた後ほど出直しますよ」

気になることはあったが、こんな最高秘密な会話に俺がいるのは場違いだろうと思い素直に出ようとしたが、

「待て、雨宮。これはお前にも関係あることだ」

出て行こうとする俺をシグナムさんが呼び止めた。俺にも関係が？シグナムさんが顎でクイツット、おそらく元の位置に戻れとの意味だと思ったので俺は空いたスペースに立つ。

すると部隊長は両肘について手を絡ませてその上に顔を乗せ、E○Aのゲンドウのような姿勢を取ってまた話始めた。

「なのはちゃんを撃墜した犯人はわかつとる。フェイトちゃんやス

バル達の証言もあることやし間違いないやろ。
犯人は、『魔王』と呼ばれる奴や」

「(魔王!?!?)」

驚きが表情に出ないように頑張ったつもりだが、冷や汗を止める事はできなかった。

『魔王』は、俺の端末にメールで意味不明な文を送ってきた人物だ。てっきり忘れていたものだが、部隊長に言われて再び思い出した。

「これを見してくれるか？」

部隊長室の真ん中に大きなモニターが表示され、そこにとある人物が写った。

黒いフードを被ってその下に仮面を付け、赤黒い、短いコートを着ていてその手にはリボルバーが付いた剣が握られている。

こいつが『魔王』？

(アッシュ、こいつを知っているか?)

(「……………さあ、俺様の記憶にはないね」)

なんだ今の沈黙は……? まあいいか。『魔王』から俺宛にメール

が来たと言えは混乱を招きそうなので、今は黙っておくことにしたのだが、

「……なにやら端でフェイト執務官がものすごい形相で『魔王』のシルエットを見ているのが目に入った。

その目には憎しみ、後悔、憎悪……いや、一緒か？ともかく負の感情がやばかった。

「『魔王』は私とフェイトちゃん、そしてなのはちゃんが8年も追いかけているSSS級犯罪者や」

「SSS級犯罪者!？」

おそらくFWメンバーであろう集団の中の青髪の少女が驚きの声をあげた。

それもそうだろう、SSS級なんてランク俺も始めて聞いた。しかし「次元」と付いていないあたり次元犯罪者ではないのか。

「この『魔王』がやらかした事件はさまざまでな。局員殺傷、研究所破壊、公務執行妨害……口では言えんくらいや」

「そして今日、奴はさらに罪を犯した。お前達も知っているとおり……高町が落とされた」

部隊長の言葉に続くようにシグナムさんが眼を瞑りながら答えた。

よほどその「高町なのは」という存在は皆にとって大事な存在らしい。

今度挨拶しておこう。

「あ、あの！！なのはさんは大丈夫なんですよね！？」

またもや青髪がシグナムさんに聞く。

「ああ、命に別状はない。幸い軽傷で済んだようだ。今は病室で静かに寝ている」

「ほ、本当ですか！！、よかった」

高町一等空尉が無事だと知り、青髪は安堵の息を漏らし、そして俺も少しながら安心していった。

そりゃあ今から世話になる上司が犯罪者と戦って無事だったと言われれば安心するに決まっている。

しかし確か高町一頭空尉はオーバーSランクだったはずだ。その隊長を落とすなんて『魔王』って奴はどれくらい強いのだろうか？

気になったので聞いてみることにした。

「八神部隊長、質問なのですがその『魔王』と呼ばれる犯罪者はどのくらい強いのでしょうか？

あのエースオブエースと呼ばれた高町空尉がやられるなんて相当の腕なんですか？」

部隊長は少し考え込む仕草をして、そして答えた。

「そうやなあ・・・現在は分かんけど、八年前のなのはちゃん
のランクはA A A +、フェイトちゃんはA A A やからなあ。
オーバーSであることは確実やないやろうか」

うへえ、またオーバーSかよ。最近の魔導師はなんでこうもランクが高いのかね？

少しでいいから俺に分けてもらいたいね。

「あの、さっきから気になってたんですけど、その方は一体誰なんですか？」

オレンジ髪をツインテールにしている女が俺を見ながら部隊長に聞いた。

そうか、こうやって対面するのは初めてだな。

「ああ、そういえばF W メンバーにはまだ紹介してなかったわ。ちようどええ、雨宮君、ええ機会やから自己紹介よろしく頼むわ」

「はいっす」

そう言ってチヨイチヨイと手招きをしてきたので俺は皆の前に立ち、簡単な自己紹介をした。

「えー、ゴホンッ。今日からここ、機動六課に配属されることになった雨宮伸二です。

階級は三等陸士、配属はロングアーチ「ああ、今日から雨宮君はFメンバーに加わってもらうことにしたからな」チ、ってえええええッ!？」

驚きながら八神部隊長を見るとニコニコ笑顔が俺の視線に入った。いやあんた笑ってる場合じゃなくてっ。

「ちょ、部隊長!?!聞いてませんよ!、何時から俺はロングアーチからフォアードに!?!」

「いやゝ今なのはちゃんがこんな状態さかい、今機動六課は大幅に戦力ダウンしてるんよゝ。んでな、もうこの際やから少しでも戦力を補うために雨宮君も戦力に加えることにしたんよ。というわけでよろしくな?」

「そんな!?!急ですよ!?!?てか俺に戦闘なんて無理ですってば!?!」

「そんなことはあるまい？ お前はたしか陸戦Bランクまで所持しているはずだが？」

後ろからシグナムさんのいらぬ弁解が聞こえてくる。勘弁してくれよう。

「いいじゃん大將、この際だから久しぶりに俺様と一緒に暴れようぜ？」

そしてさらに追い討ちをかけるが如くアッシュが裏切り。こいつ、余計なことを！

「ふむ？ 今の声は雨宮のデバイスか？ 今の言葉は興味深いな」

「俺様と大將の力を甘く見てもらっちゃあ困るねえ？ これでも俺達は陸士訓練校では負けなしだったんだぜ？」

「ほう？ それはそれは、おもしろい」

「ちよいあんたら、何勝手に話進めてんですか？」

なんか俺の関係なしに話がどんどん進んでいってる。まずい、このままじゃ本格的にFWメンバーに入ることになってしまう!!

「じゃあ雨宮君はこのままフォアード」ちょっと待ってください部隊長!!」・・・なんや、まだなんかあるんか?」

(まずいまずい!! なんとかして!! なんとかしてこの場から抜け出さなくては!! になにか、何かないのか?)

俺はない頭を最大限にフル活動、高速回転させながら打破策を考える。

そして、ひとつ、思いついた。

「模擬戦・・・」

「ん? なんやて?」

「模擬戦・・・、そう!! 模擬戦で俺が勝ったらこの話はなかったことにしてください!! 俺が勝ったらこのままロングアーチで、俺が負けたらFWで働く。これでどうです!」?

考えた苦肉の策。それは模擬戦であった。ここでいくら反論しても無駄なので、俺はこれに賭けたのだ。

「…………忘れてたアアアッ!!!!!!!!!!」

さてさて皆さん、今俺、雨宮伸二が立っている場所は何処でしょう？

訓練所？

正解。

じゃあ次の問題、俺が提案した模擬戦、相手は誰でしょう？
選択肢は3つ、さあどれ？

1、オツパイ騎士

2、ニート侍

3、バトルマニア

「何をしている？さっさとしなにか？この烈火の将がお前の相手を
してやるというのだ、感謝するがいい」

一番と二番と三番を選んだ貴方！！

正解！！

答えはシグナムさんでしたーッ！

ってふざけんなやあああああああああああああああああ
ッ！！！！！！！！

なぜシグナムさんが相手やねんゴルアアアアッ！！！！
そっすだよ忘れてたよ！！、ここ異様にランク高い魔導師多いんだっ
たよ！！

「さっきから何ブツブツいってんだい？大将？」

何も罪がないが如くピカピカと光るクソデバイス。てめえ、後で砂
じやりの上で踏みつけてグリグリしてやる。

「裏切ったくせに何を言うか」

「まあまあ、怒らないでよく大将！これも一つの経験だって」

「なんの経験だったの」

「おい、お喋りはすんだか？」

目の前では今か今かと戦闘を待ち望んで剣を振るうシグナムさんがいます。

くそお、この人と戦うことは免れそうにないなあ・・・

「つーかなんでシグナムさんが相手なんで？」

「何、ロングアーチでありながらBランク魔導師とは何か意味があるのではないかと思ってな。」

主に頼んで私がお前の相手をする事になったのだ」

分かりやすい解説をありがとうございます。つまり俺と戦いたかったと。

「・・・はあ、ってあれ？」

つーか良く見ると六課の奴ら来てるじゃん。

目を横に向けると、そこにはさっきまで部隊長室に集まっていた面
子が全員そこにいた。

隊長群は俺を試しているような顔をしていて、FWの小さい少女、
青髪の少女、赤毛の少年は期待の眼差しでこちらを見つめ、
残りのオレンジツインテールはムスツとした顔をしている。おいお
い、なんでこんなに集まってんだよ。

「戦闘は苦手なんだがなあ……ふう」

……しかたねえっ。

俺は目を瞑り、精神を集中させる。

相手は守護騎士最強の武士。

面白い、精々楽しませてもらおうか。

「アツシユ」

「……了解だ、旦那……俺様、セツトアップッ……！」

俺の腰にぶら下がっていたアッシュが光を放ち、次の瞬間には両腰に大型の手裏剣が装備された。

[illegible]

「む、それがお前の獲物か・・・妙な形をしているな・・・それでどのようにして戦うのだ？」

シグナムの問いに雨宮は腕組みをして薄く笑い、

「ふふ、それは戦ってみれば分かることではないか？」

冷たく、いつもとは違った低い声が雨宮の口から発せられた。

目もいつものようなだらけた目つきでもなく、何かを楽しむような目に変わり、

その変化にシグナムも気付く。

「・・・（奴の雰囲気が変わった？）・・・そうか、それは楽しみだな」

改めてシグナムは自分のデバイス、レヴァンティンを構える。

「ご期待に添えるよう、努力しましょう・・・」

雨宮も続いて、両腰に付いた十字手裏剣の真ん中を持ち、手のひら

で高速回転させながらアッシュを構える。

「やるからには本気でいかせてもらう。手加減などは期待するな」

「ふふ、その余裕がいつまで持つか見物だな」

「さあ？・・・それはどちらの台詞だろうか、な」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（なんだ？奴の言葉使い、態度、
全てが変わっている・・・？）」

ワイヤーでぶら下がっているアッシュを、まるでヨーヨーのように
回転させながら烈火の将を見る。

「さて・・・」

雨宮が手をクンッと少し上に上げると、アッシュが再び手のひらに
パシッという音を立てながら戻ってくる。

そしてそれを合図に、

「さあ遊ぼうか！烈火の将シグナムよッ！！！」

[illegible]

「つくう！」

だがさらに雨宮は後ろに大きく跳び、その手にあるアッシュをシグナム目掛けて投げつけた。

197

「甘いな、この程度で・・・！なに？・・・消えた？」

ついさっきまでその場にいた雨宮の姿が消えていなくなっている。辺りを見渡すが彼の姿は何処にもなく、シグナムは少し焦る。

『ふふふ、さすがは守護騎士。噂に聞くほどの腕であるようだ。俺の動きについて来れるとは中々面白い』

「っ！、どこだ！、どこにいる！！、隠れてなぞいないで正々堂々と相手をしろ！」

どこからともなく聞こえてくる雨宮の声にシグナムは周りを警戒する。幸い今立っている場所は目立って大きな障害物はなく、前後左右から攻撃が来てもシグナムなら反応できるだろう。

『隠れる？おかしなことを言いますね？俺は隠れてなどいませんよ。あなたの側にいるのですから』

「なんだと？」

再び自分の周りを見渡すが、それらしい影は見当たらない。不思議に思ったシグナムは視線を下に落とし、そこで気付いた。自分の足場の部分がまるで影のように漆黒に染まっていることを。

「下かッ!!!」

「遅いですね」

だが気付いたときにはもう遅く、漆黒の渦の中から勢いよく飛び出してきてシグナムの腹にアッシュが通り過ぎた。

「ぐああッ!!!」

軽い反動でシグナムは後ろに倒れた。見るとバリアジャケットは破け、彼女の綺麗な白い肌に黒いかすり傷が付いていた。

咄嗟に体が反応したのか、攻撃される直前にシグナムは体を大きく背けたのだ。

倒れているシグナムを見て、雨宮は薄く笑う。

「やはり俺の反応について来れる・・・本当に关心しますよ。あなたのような強い人は今まで会った事がなかったのですからね」

片手でアッシュをヨーヨーのように回しながらそんなことを言う雨宮。

「それはこちらの台詞だな・・・なんだ今の攻撃は？お前、さっき地面から出てきたのか？」

「すみませんね、わざわざ自分が不利になるようなことは言えませんが・・・ではそろそろもう一度」

笑みを浮かべている雨宮の足元がブラックホールのように黒色の渦が広がっていき、そこにゆっくりとまた潜っていく雨宮をシグナムは黙って見ていた。

（やはり、奴は地面に潜っている。移動系の魔法か？シャツハが使っている魔法と同じように見えるが・・・油断はできませんか。だが！）

「ハッ」

シグナムは上を見て、そして大きく飛び上がって空中に停滞する。そして今だ地面の中にいるであろう地上に向かって、大きな声で言う。

「お前のその技、確かに厄介な技だ。さきほどのように奇襲をされたらたまったものではない：だがその技には一つ弱点がある。それは相手が地上にいること限定ということだ！」

『……………』

「さあ、隠れてなどおらずにさっさと出てくるがいい!!」

『……………ふん』

シグナムの挑発に乗ったのか、再び地面に黒い渦が発生し、そこから両手にアッシュを持っている雨宮が現れた。

アッシュを回転させながら雨宮はシグナムを睨む。

「的確な判断だ。確かに空へ逃げられるとさきほどの技はもう使えないな……………」

ではこれはどうだ？」

「なに？」

雨宮はその場で大きく体を捻らせ、

「切り裂けッ、アッシュ」

「ッ！」

ワイヤーのついたアッシュをシグナム目掛けて飛ばす。

シグナムはレヴァンティンで防御したが、ワイヤーで付いているアッシュはレヴァンティンに絡んで巻き付いてしまった。

「ぐっ！！……く……く！！！」

シグナムは必死にワイヤーのついたアッシュを剥がそうとするが、その強力な耐久ワイヤーは切ることは出来なかった。

「戦場で己の獲物が手から放れればそれは敗北を意味する。さあ騎士よ、ここからお前は どうする？」

やられた！と、シグナムは思った。

今は何とか耐えてはいるが雨宮の凄まじい力によって今にも自分の手からレヴァンティンが離れそうだ。

あの奇襲攻撃を喰わんがために距離を取った事が裏目に出たのだ。

アッシュより伸びているワイヤーを引きながら雨宮は口元を歪める。彼の頭の中ではもうシグナムが次ぎにどのような行動をするか予測がついているからだ。

（さあ来るがいい。お前はアッシュと共に俺に近づくしか選択肢は

ない……………!)

「く、くう……………!……………はああああ!!!!!!」

そして雨宮の予想どおり、シグナムはそのままの状態で雨宮に近づいてきた。

それを確認した雨宮はもう片方のアッシュを一度ヨーヨーのように回し、カードリッジをロードする。

「満足に獲物を振れぬまま敵にノコノコと近づく……………そうだ、それが正解だ。

過ちという正解だなッ!」

手のひらのアッシュが黒紫色の靄を出し始め、雨宮はもう片方のワイヤーを強く自分側に引き寄せた。

「はあああああああッ!!!!!!」

「一閃」

ガギンツと。

鈍い金属音が発生してシグナムと雨宮は鏖迫り合い状態になる。

ただ、きついの表情をしているシグナムとは違い、雨宮は余裕な表情で笑っていた。

「ほお？カードリッジを使っても大してダメージはないか」

「…………貴様、本当にBランクなのかッ？…………そのような力を持って、なぜロングアーチに！」

「力があるからとて誰でも戦闘員になるとは限らない。俺は自分の道を選んだ。それだけだ」

数秒の会話の後、大きくレヴァンティンを弾くと同時に、絡まっていたアッシュを引き寄せる。

「…………ふん」

シグナムは二三度剣を振り、改めて構え直す。

「そういえば言っていなかったな、この模擬戦の目的を。実はこれはお前がFWに入ることと兼ねて高町の変わりとなれるかの試験なのだ」

「……？」

突然の事実には雨宮は少し眉間に皺をよせた。まだ会ったこともない「高町なのは」の変わりとは、聞こえが悪い。

「……なあシグナムさんよ、旦那が『変わり』って、どういうことだい？」

アッシュも不愉快に感じたのかいつもとは違い、低く、威圧的に言う。

それを感じたのかシグナムは申し訳なさそうに言った。

「機嫌悪くしたのならすまない。しかしわかってほしい。今、主の六課の戦力ダウンは危険なのだ。

先ほど話した『魔王』の件、ジェイル・スカリエッティの逮捕、地上本部への対応……やることは山詰みある」

嘘ではない、と。雨宮は思った。それはシグナムの眼を見ればわかった。

「都合良すぎだよ、あんた達。旦那は管理局の道具じゃないんだ、強制的に持ち場移動なんてふざけてるね」

「少し黙れ、アッシュ」

「でもよお、旦那」

「黙れと言った。聞こえなかったのか？」

「……………あいよ」

アッシュを黙らせ、雨宮は眼を瞑った。

「部隊長室で、俺にも関係があると言っていたのはこのことか」

「……………ああ、そうだ」

「……………」

しばらくの沈黙。シグナムと雨宮はジッとお互いの眼を見ている。試合を見ていたフェイト達もその雰囲気になまじりか誰も言葉を発さない。

風が吹き、ただ時間が経つのみ。彼の模擬戦はまだ、始まったばかりである。

十奏目（後書き）

剣とかと違って手裏剣は攻撃方法が格好悪いです。

剣で斬りかかったとかではなく、

手裏剣を投げつけた・・・うん、ださい

十一 奏目（前書き）

昨日久しぶりにクロージーズZERO見た。

あの生き方憧れるなー

十一 奏目

「墜^{エース}ちた希望…高町なのは…」

目を瞑り、伸二は何かを思い出そうとする。

あの時、機動六課の人物データで彼女の姿を見た時から伸二は妙な違和感を感じていた。

（おかしい…なぜ思い出せない？）

自分はそんな忘れやすい性格ではない。それは本人が一番理解している。

それでも、

それでも、思い出す事ができない？ 否、

「記憶が欠落している…？」

「旦那」

ハッと、アッシュの呼び掛けに顔を上げて今が試合中である事を思

い出す。

「っ…悪いなアツシュ、少し考えごとをしていた」

「俺はいいからさ、目の前の敵に集中しなって」

見るとシグナムはじっと伸二を見たまま動いていなかった。
不意打ちで攻撃をしないのは騎士ゆえにか。

伸二は軽く首を鳴らし、

「すまないな、試合中に雑念とは俺もまだまだだな」

「いや、いいさ…それより」

シグナムの言いたい事を伸二は理解したのか、返事の代わりにアツシュをシグナム目掛けて飛ばす。

当然のように意図も簡単にかわされるが、その行動によってシグナムは笑い、

「なるほど、これがお前の答えか。試合に私情は関係ない…そういう事だな？」

戻ってきたアッシュをパシッという音を発てながら取り、伸二も笑う。

「そうです、これは俺とあなたの試合だ。変わりなど今は関係ない。試合であるからには戦い、闘う。それだけですよ」

「…確かにお前の言うとおりだな。これは私とお前の戦いだ」

レヴァンティンからカードリッジが吐き出され、それによって刀身が炎に包まれる。

「どうやら私も甘くなったようだ、試合の相手に申し訳なさを感じるなど」

「ならばその償いは、これからの戦いで示してください…アッシュ！」

伸二も同じく、カードリッジを一発ロードする。

そしてまた両手でアッシュを垂らしながら回転させ、

「行くぞアッシュッ！！」

「あいよ！ インビシブル！」

タンツと軽く跳び跳ねると一瞬にして伸二の姿が消える。

「わっ！ ティティ、ティア！ あの人消えちゃったよ！？」

「どういう事…？ あたしと同じ幻術の類いかしら…？」

スバル達はとても驚いていたが隊長群、つまりフェイト達は険しい表情のまま視線を左右に動かしていた。

「まさかとは思ってたけどこれほどとはなあ」

「凄い速さだね…私でもギリギリ」

「シグナムが負けるわけねえけど、こりややべえかもな」

スバル達はフェイト達の会話に え？ という顔をし、エリオとキヤロはそもそも会話にすらついてこれてない。

「やけど速さだけで私のシグナムには勝てへんで…さあどないするんや？」

はやてが自信げに言った瞬間、

「モードアクセルッ」

訓練場は紅蓮の業火へと包まれた。

☆

伸二の使う魔法は幻術系でもソニック系でもない。

ならばフェイト達が目で追っていたのは何か？

それは、

「炎」

消えた伸二を目で追いかけているが、シグナムの出した答えはそれだ

った。

「空間に何かが映り、それが順序づけに現れれば、人はそれを何か
が高速で動いていると勘違いをする。」

そうか、お前はそのような使い方をするのか」

太陽の光を鏡で地面に反射すると、そこには反射光が写る。

鏡を回すと、それにそって反射光も動く。

どれだけ早く動かしても、反射光は鏡を屈折した場所に映る。

つまりこれに例えると、伸二が鏡の役割を果たし、自身で産み出した光：つまり熱を至るところに写しだしているのだ。

「面白い、実に面白い」

嬉しそうに笑い、シグナムはレヴァンティンを鞆にと戻す。

「気がつかなかった：お前が私と同じ、炎熱の魔力変換だったとは。
これほどの嬉しい気持ちは久しぶりだ」

「……」

恐らくどこかで、シグナムの見える位置に伸二はいる。そう判断したか、

「だが私に小細工は通用しないッ!!」

ギンッと目を見開き、鞆からレヴァンティンを勢いよく引き抜く。
すると業炎が舞い、立体化されたビルなどを包み込んでいく。

「隠れるのが十八番なのだろうが、それでは満足できん。そろそろ
お前の本気を見せてはくれないか？」

「…………ふん」

炎に包まれた訓練所の向こうから、ゆっくりと人が歩いてきた。
人影で見えないが、その人物は焼け付く音に混じり、足音だけが確
実にシグナムに近づいている。

「俺以外に炎熱の変換資質を持つ人物を見るのはお前で二人目だ」

何かを回転させる音が聞こえる。

「あの人はなかなかの腕だったけど…もうここにはいない」

カードリッジをロードする音が聞こえる。

「同じ炎熱を持つ者として……………」

ボウツと、かき消すように青い炎がシグナムの紅い炎をかき消していく。

その炎はどこまでも青い、蒼い、碧い。

「…………ようやく、私も本気になれそうだ」

シグナムの炎が跡形も無くなり、そして次第に歩いてきた人物がはつきりと見えてきた。

「アッシュ、お前の力を見せてみろ」

「お前じゃなくて、俺達、な。旦那……………」

「ふん…………フォーム変更ッ…」

両手で垂らしているアッシュを蒼い炎が包み込む。
そして次に見えた姿は、

「モード、アクセルツ」

チャクラムの形状をし、シグナムと対になるような青い炎を纏っていた。

十一 奏目（後書き）

かんそーほしーです。

十二奏目（前書き）

地震…か。

自分は四国に住んでいるので被害などはまったくありませんでした。でも、こうテレビでニュースを見ていると何とか複雑な気持ちになりますね。

でも俺が出来る事なんて電気の節約、募金などの間接的にしか救えません。

歯がゆいです。

亡くなられた遺族の方々は…いや、こんな事書いてもしょうがないです。

自分には何も出来ないのですから。無力、ですね。本当に。

十二奏目

「いたたたたっ！ 痛いですってシャルさん！」

「我慢なさい、それでも男の子ですか？」

「いや、普通こういうのって優しく『はい消毒しますよ〜？』的な感じじゃ…っいててててて！！」

ちよ、刺さってる！ 楔子^{ピンセット}刺さってるって！！ そんなベシベシ叩いたら傷口拡がるから！

「このくらいの傷なんですか。シャルの言うとおり、男の子なら我慢するですよ！！」

「そうは言いますがね、リイン伍長。この雨宮伸二、女に振られる心の痛みなら馴れてますが肉体的痛みには馴れないんですよ」

「それとこれとは関係ないです！ って、リインは伍長じゃなくて曹長です！」

「あゝらら、あそこはフニャフニャなのに言うことは固いつすね、きついつすよりイン曹長」

「ぶーッ！！　セ、セクハラ発言です雨宮さん！！　それとリインはフニャフニャ以前についてません！！」

「おい、そんな両手をブンブン振り回さんでください危ないっす。あれ？　シャルさん、なんでそんなゴミを見るような視線でこっちを見てるんで？」

「ここにゴミなんてありませんよ？」

「リインに何言わしとんのやこのアホオ！！！！」

「ふごおッ！！！！！！！！」

突如視界のシャルさんが一気に横に高速移動、続いてリイン曹長が通り過ぎ、最終的に世界が傾いた。

そしてシュタッと格好良く着地。肩ほどの長さの髪を手で靡かせ、

「まったく、シグナムとの試合で心配やったから見舞いに来てやったのに……………来て損したわ」

「いいドロップキックです、部隊長。これを気にわたくしとシューティングアーツの練習でもしますか」

「生憎、私にそんな余裕あらへんよ。それより……」

部隊長は床に倒れている俺を頭からつま先まで観察し、肩をすくめた。

「ふむう、見舞いの必要はあらへんかったなあ。大丈夫そうやんか」

「いや、ついさっき誰かさんに蹴られて頭が熱くなっているですが」

「頭から冷水かけたら治るやろ」

「いいえ、女になります」

「豚で十分や」

「せめてパンダにしてください」

まあ実際こんな口聞ける時点で大丈夫なんだけど。床から立ち上がり、のそのそと芋虫みたいにベッドへ戻る。布団を全身に被り、ひょこつと頭だけを出して部隊長を見る。

「いやね、実はまだ俺の魔力回復してないっすよ。唯でさえわたくしの雀の涙ほどの魔力であの『女帝四天王』の一人を相手にしたんですからそれはそれは…」

「ちょい待ち、今聞き捨てならん事言うたな。なんやって？ 『女帝四天王』？」

「あ…」

いかん、つい口が滑ってしまった。元いた職場での名称を本人の前で言ってしまうとは！！
命名俺、この四人は馬鹿みたいに魔力があることからその名前をつけました。

ちなみに『女帝四天王』とは、高町隊長、テストロッサ執務官、部隊長、シグナムさんの事である。

「……………なあ雨宮くん」

「…なんでしよう」

部隊長の笑顔が怖い。笑っているのに怒っているとはまさにこの顔の事だろう。

「ちょっと体育館裏までこよか」

「…機動六課には体育館があるなんて初耳ですね。しかし謹んでご遠慮します」

「勘違いしとるようやな。これはお願いやない、命令や」

クイッと首を親指で…要するに覚悟しろと…？

「……………」

ああ、この雨宮、短い人生だった…。俺は澄んだ顔で、部隊長に言った。

「……………墓には、こう…掘ってください。勇者雨宮は…最後まで、勇敢…だった、と」

ねえシャルさん、リイン曹長、なんで手を合わせて祈ってるんですか？ 怖いじゃないですか。

そんな事より助けてくださいよ。今度いい喫茶店教えますから。

「ご愁傷様…雨宮くん」

「ごしゅうしょうさまです…」

どっかの小説タイトルみたいな事言っていないで…。

部隊長に引きずられながらという他の局員の目つく行動はとても恥ずかしかった。

そんな俺を気にせず部隊長はズンズン進む。

「覚悟しいよ？ ゲームの見よう見まね必殺技、ハヤテ版サイ○クラッシャーを受けて無事やった者はおらへん」

「おや、部隊長もですか。実はわたくしめも最近剛掌波を極めました…」

「ラ○ウ W W W」

「べ○ W W W」

「なんやと、あんた○ガ様を馬鹿にするんか？」

いや、逆にあの若○ボイスのどこがいいのか知りたい。普通リユ○や○ンだろ。

「そちらこそ一生の悔いがないあのお方を馬鹿にされたではありませんか」

いやーあの漫画は最高だったね。特に『南斗五車星』のどこなんかもう…。語ると一時間ほど掛かるので今は言わないが。

「あんな日清○品のどこがええんや」

「貴様！ 今ラ○と一緒にしたな！？ まああれはあれで美味しいけど…ラーメンと世紀末覇者と一緒にするなんて言語道断！！ベ○なんぞラオ○様の水虫にも及ばんわ！」

「…言うたな？…なら喰らってみい！ 必殺、デ○ルリバス！！」

「うえ！？ ギャああああああああッ！！！！！！！！」

本当に出来るなんて思いませんでした。

.....

「.....」

「? どうしたですか? シャマル?」

「うーん、今思えば雨宮君、一瞬だけどよくシグナムと互角に渡り合えたって…思ってたね」

「ああー、それは確かに、その事を聞いた時はリインもビックリしたです」

「もし、魔力切れがなかったら、どうなっていたでしょうね…」

シャルは二時間前の戦闘を思い出した。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ふふふ、さあ始めましょうシグナム。本当の戦い^{ころしあ}を…ね」

「…貴様、本当に雨宮陸士か？ 早朝に出会った時とはまるで雰囲気が違うが…」

「愚問ですね。今貴方の目の前にいるこの俺が雨宮ではないとしたら俺は一体誰なんです？ 偽物とでも言うつもりですか？」

「……質問を変えよう。今の貴様、そして朝私と出会った時の貴様。普通はどっちなのだ？」

「なんとも言わせないでください…愚問です。俺は俺…それだけで

すよ」

答えになっていないだろう…！ そうシグナムは思ったが、このまま尋ねていても納得のいく答えが得られるとは思えない。

ならばどうするか、簡単だ。

「……………」

シグナムはレヴァンティンを構える。自身の頭より高い、それは上段の構えだった。

「私は高町やテストロッサみたいには話上手なわけではない…できるのは己の剣で示すことのみ」

「ほう…？」

「それと…今更だが上司へのその口の聞き方、許されざるものではないな」

上司には敬語、現代の社会では当たり前の事である。なのは達ならば許してくれただろうが、今日の前にいるのは融通の利かない人物なのだ。

伸二は一瞬鼻で笑い、紳士のような礼をしながら言う。

「これは失礼を。この喋り方は昔からのクセのようなものでしてね。くくく…今さら直すことは出来ませんので」

「何、問題はないさ。今から驕^{おご}りをしてやる。喜ぶがいい、この私が本気で相手をしてやるのだ」

本気。シグナムの口から出た言葉に観客は息を呑み、皆こう思った。

『怒っている』

と。

「同じ炎熱の変換資質同士として、やはりどちらが上手く使えるか知りたいのでな。お前もそうだろう?」

「そうですね…確かに興味はあります。俺の蒼炎…貴方の烈火…相手にとっては不足…ない!」

「エンチャント、蒼炎熱!」

カードリッジがロードされるとアッシュが炎に包まれる。炎は雨宮の手まで覆っているにもかかわらずその手は火傷すら負っていない。

「はぁぁッ！！！」

「ッ！」

瞬時、雨宮の姿が消えると同時に響く金属音。見ると、いつの間にか伸二とシグナムはその場から消えていた。

「……ッ」

「……ッ」

姿が確認できないまま定期的に響く金属音。この音はおそらく双方が打ち合っている証拠だろう。

その美しく舞う紅、蒼の炎は訓練所を包み、観客席からの視界を奪う。咄嗟にシヤマルが端末での映像を映そうとしてもそれは無意味に終わった。

結果、この二人の空間の外にいる人物からは中の様子は分からないままになってしまった。

おそらくはやて達が次にシグナムの姿を見るとき、それは勝敗が決まった時だろう。

はやて達は妙な静けさのためか誰も言葉を発さない。観客席の皆は蚊帳の外と化してしまったのだ。

誰も言葉を発さない、静寂な時が続く。

(…………やはり一筋縄ではいかない…な)

一方、外の静けさとは打って変わってこちら側は雑音の嵐と化していた。絶えず燃える双方の炎、崩れるビル、二人ともまったく遅れをとってはいなかった。

打ち合いから一端退き、距離を取っている間に伸二は考える。

（奴の…シグナムの戦闘能力は予想を超えていた。まさかアクセルフォームまで使う事になるうとはな…しかしこれを発動していなければおそらく俺は負けていただろう）

（「でもよ、旦那」）

伸二の愚痴に答えるようにアッシュが言う。

（「いくら火力重視のアクセルフォームで腕を補おうが魔力の量は変えられねえ。唯でさえ馬鹿魔力を持つ守護騎士に持久戦に持ち込まれたらこっちが不利だぜ？」）

（……………）

確かに。と伸二は思う。今現在は互角ほどの戦いをしてはいるが、それは力の問題。この状態が続けば先にこっちが魔力切れを起こす。いくらトップスピードが高い車に乗ろうがガソリンが少なければ無意味、すぐにガス欠になってしまう。

シグナムの魔力は不明だが、空戦Sーランク、そして副隊長という肩書きがある以上相当の魔力があると思われる。仮にも守護騎士最強の騎士だ。

（…長期戦は不利、それは解ってはいるが…）

どうする？ 今のところ力は互角、そう、『互角』なのだ。ヘタに勝負に出て、仕留め切れなければその時点で伸二の敗北が決定する。

（時間はない…今この状態でも魔力を食っている。考えろ…）

（「旦那…らしくねえぜ。俺様としても同じ炎熱使いとして負けたくはねえし、グダグダ考えるよりバーツとやろうぜ？」）

（簡単に言うが、確実に仕留められるとは思えん。相手はまだ余裕そうだ）

チラッと後ろを向くと、伸二の5mほど後ろにシグナムはいた。シグナムは伸二の視線気づくと楽しそうに笑う。

「面白い…面白いな雨宮…だが足りない…まだ足りぬぞ。もっと私を楽しませてくれ！！…レヴァンティン！！」

「ッ！」

「旦那ッ！ 避ける！」

ゾウツと背中に鳥肌が立つ。まるで首に刃を突きつけられているような、そんな感覚だ。

「紫電…一閃！！」

凄まじい炎の斬撃が後ろから迫る。カードリッジを使った攻撃でこれほどの威力が出せるとは、伸二も驚いていた。しかし、今はそんな事を考えている暇さえない。伸二は体を捻らせ、迫り来る斬撃をなんとか避けようとする。

「ぐうッ……！！！！」

「旦那！」

斬撃は…直撃は回避することができたようだ。しかし、無傷とまではいかなかった。

左足に感じる熱い痛み、どうやら喰らってしまったらしい。

「この距離でかわしたか…それでいい。この程度でやられては困るからな」

もう後ろを向いている余裕はない。今気づいたが、シグナムとの距離が近くなっている。

(…速度も奴のほうが上回っているようだな)

(「んな事言ってる場合じゃないでしょうがあ!？ どうすんのさ、さっきの傷は軽傷とは言えないぜ?」)

(問題はない。飛行、及び戦闘に支障がないならばな。それよりアツシュ、今現在の残り魔力はどれくらいだ?)

少しの時間の後、答えはすぐ返ってきた。

(「…3, 400ってとこだね。決め技を出すにはギリギリな数値だ」)

(……………ふん)

十分だ、と伸二は言葉を返した。両手に持っているアッシュのカードリッジをロード、纏っていた炎が勢いを増す。

「……………」

そして背後にいたシグナムもその様子を見て不信に思う。

（ここで決めるのか？ いいだろう、ならば私もそれに答えよう）

「レヴァンティン……騎士の名に恥じぬよう、全身全霊を持って向かえ打つぞ」

「J a w o h l」

同じく、こちらもカードリッジをロード、合計3つの葉莢がはき出された。

「…アツシュ、決着は一瞬、ミスは許されないぞ」

「りょーかい、俺様本気モードで行くぜえ！」

「…………ふうッ！！！！！！」

一気に飛行速度を上げ、シグナムから距離を取る。そして大きく旋回、そのままの速度でシグナムに向かう。

「正面から来たか！　いいだろう！！」

下段の構えをするシグナム。すでにその手の獲物はその名の通り烈火に包まれていた。

「はああああああ………ッ！！」

伸二は体の前で両手をクロスさせ、魔力を込める。この一撃で決めるという決意と共に。

蒼い炎がアッシュを、そして伸二の全身を包み込む。

「蒼炎、我一体”我ノ影は炎、陰の蒼炎”」

「紫電………」

「雨宮流奥義……」

「いっせ………っ！？」

「おぼr………うお！？」

ガクンと、伸二の体が急速落下し出す。伸二はわけがわからないままアツシュを見る。

「…………あらゝ、時間切れ、かな」

アツシュより言われた事実、それは、

「……………無念」

魔力が、

底をついたのだ。

.....

「.....」

「私達は直に見てませんから何とも言えないですけど、気になりますですね」

「そうよね…」

シヤマルは肘を付きながら伸二のカルテを見る。左足の怪我は幸い軽傷だったようで、生活には支障ないようだ。
今日の模擬戦では単に魔力切れを起こしたただけであり、それ以外は何も問題ない。

「.....でも」

カルテの後ろにあったもう一枚の紙を、前後入れ替える。そこには頭の痛くなるような難しい文字がずらりと並んでいる。

「……………これは一体」

しかしシャルはその意味が理解出来るのか、険しい表情をする。
そして何を思ったのかそのカルテを持って勢いよく医務室を飛び出した。

「ジャ、シャル？ どうしたんですか!？」

「少し、雨宮君の所行って来るわ」

カツカツと、ハイヒールの音を鳴らしながら彼女は背を向けて歩き出した。

十二奏目（後書き）

ギャグと戦闘描写をチャレンジ。

どうでしょう？ わかりやすいですか？

どんな感想でもいいので意見を下さると嬉しいです

十三奏目（前書き）

なんでかなー、書いているとどうしても話がシリアスっぽくなって
しまう…。

十三奏目

「あつー……まったく、酷い目にあつたな…」

「もう済んだ事だしいいじゃないの。元はと言えば大将が悪いんだし」

部隊長の『お話』を何とか終え、久しぶりに日に当たりたかったため気分転換も兼ねて俺はミッドチルダを散歩する事にした。
六課^{こく}に来てからまだ日は浅い。色々知っておいて損はないし、観光もしてみたかったしね。

「だからと言ってジャージはないぜ大将…私服くらいあるだろうに」

「ん？　そうか？」

「ここは地球じゃないってのに……はあ、しかもスリッパってどうよ？」

「……………そんなにおかしい？」

「明らかに浮いてるね」

そういえばさっきから誰かの視線を感じてはいたが、まさか俺が原因だったとは。

これはいかんぞ。

「しゃーなしや。アッシュ、近くに服屋でもないか？ なんならブティックでもいい」

「ちよいと待ってねー……おお、良いところに一つだけあったよ。ここからすぐ近くでね」

アッシュの示した場所は確かに近かった。そうとわかった俺はさっそくその店へ向かう事にした。

.....

「じゃーん！」

「……………」

「……何とか言ってくれアッシュ。これでは試着室から思いっきり飛び出した俺が馬鹿みたいじゃないか」

「大将…その、何…いいセンスだと思う、よ？」

なぜ最後が疑問系なのか聞きたいが、所詮デバイスには俺のファッションは解るまい。

「ふん、アッシュは知らないとは思うがこれは『お兄系』と呼ばれるファッションだ！」

荒ぶる鷹のポーズをしながら小物入れに置いてあるアッシュに自分の服を見せる。どや？

「……………」

「ワイルド感のあるカジュアルスタイルと、セクシーなモードスタイルを融合させたファッション…俺にぴったりとは思わないか？」

クレリック襟の半袖スカシヤツに白の5分袖カットソーをレイヤード、足元はバイカーらしくゴツめブーツ、更に（ry

「あー！ー！はいはい！ー！！ 格好いい格好いい！ 大将は格好いいよ！ー！！」

「む、そうか、やっと解ってくれたか。さすがは俺のデバイスだな、H A H A H A H A H A ！ー！！」

「（この脳味噌お花畑は治らないものかねえ……）」

さて、これで人目につくことはないやろ。今度こそそのんびりと観光出来そうだ。

俺は店員にお金を払い（無論、必要経費で落としました）店を出た。太陽が眩しい…雲一つないこの青空を見ていると清々しくなってくるね、本当に。

「いい天気やー……っとそうだ、高町隊長の見舞いになんか買っていくか」

「へえ？ 大将にしちゃ珍しいね…まさか？」

「いちを仕事の上司だしなく。それに今日の午後からは高町教官の代わりの書類どうこうせなあかんし。あとアッシュ、別に俺はそんな事は全く思っていない」

あの模擬戦で俺の評価は上がったらしく、かくして俺はめでたく？
スターズ分隊を臨時的に承る事となりました。

いやいやまったく、数日前にきた二等陸士に臨時教官やれて、部隊長もとんでもない事を言ったもんだ。

まあその分給料も増えるってんだからいいけど。

「つつてもなー、女って何もらったら喜ぶんだろな」

香水？ ダイエット食品？ 指輪？ ネックレス？ 挙げていけば
キリがない。

「何にしたものか…お？」

なんかいい感じのカップルっぽい二人組はっけーん。俺は軽くスキップをしながらその二人組に近づいた。

「すみませーん、その『次元犯罪者スカリエッティがズラ被ってサンングラスしたらちようどこんな感じになるんじゃない？』って人止

まっ てくださいーい♪」

「ブッ!!!」

缶コーヒーを飲んでいたその男性は霧状にコーヒーを吐き出し、びっくりにした表情でこちらを見た。

「ド、ドクター!?! 汚いですよ、コーヒーを口から吐くなんて…」

「い、いやすまないウーん……宇野君。少し動揺してしまっ ね。それよりさっきの声は……」

「いやー引き止めてすいません、『次元犯罪者スカ（ry）の方。実はちよいとお聞きしたい事がありましたー」

「うお! い、いきなり何だね君は……」

「……………ッ」

あれまどうしたんでしょう。白いズラっぱいものを被りグラサンをした男性は苦笑い、紫のストレートの髪をした綺麗な女性は俺を睨

み付けてきてる。

「ドク…徳田^{とくた}さんに何かご用かしら？ 私達は今急いでいるのだけれども？」

「おや徳田さんと言うのですか。そしてそちらの女性は宇野さんとお見受けしますが？」

「…………ああ、そのとおりだ。話はいいが、宇野君の言うとおり私達はこれから家に帰る予定でね。娘達が待ってのだよ。なので用事があるのなら手短にお願いするよ？」

「ああ大丈夫です、そんな時間掛けませんから。ただ少しお伺いしたいことがありますてー」

「「……………」」

「女性って一体どんな物をもらったら喜ぶんでしょう？」

「「……………は？」」

「いやね、お話をお聞きしているかぎりお二人にはご息女いるとの

事なのでそのところ詳しいのかと思ひまして」

「ご息女……ああ、まあ……いるな」

「ほう、やはりそうでありましたか。歳はお幾つで？」

「……………24、23、20、15、14、6、4歳が一人ずつ、12歳が二人、まだ生まれていないのが……三人だ」

「ちょ!?! 十二人も子供いるんですか!?! 大家族ってもんじやありませんよそれ!?!?」

（ドクター!!!!!! 何真面目に答えているんですか!! これで私が三人妊娠してるみたいじゃないですか!!!!!!）

（え、ああすまない……ついつい……）

「いやはやそれにしてもお二人ともお若い……と話が脱線しました。それほどのご息女がおられるのですから大体何をもらったら喜ぶかわかるでしょう。」

それで何度も申し上げますがどのようなものをもらったらお喜びになられましたか？」

「……………（ウーノ、ここは何と答えればいい？）」

「……………（…知りません）」

「（ウーノ！？ 僕を裏切るのか！？）」

「（しりません）」

「……………き、気持ちだ」

「ほう、興味深い解答ですね。気持ちとは一体？」

「…一番大切なのはその子を思う気持ちだ。先ほど話したとおり私には今9人…そろそろ12人になるが娘がいる。

しかし私は全員、平等に育ててきた。誰一人不自由にさせる事なくね、」

「……………ほうほう」

「たしかにプレゼントというのは物が多いが、なにぶん私は口下手でね。この愛情が上手く娘には伝わらないんだよ。だから僕は気持ち

ちで答えている」

「……ふむふむ」

「皆平等に、仲良く、健全に育ってほしいという思いを込めて僕は彼女たちを育ててきた。だから今娘達は皆元気に育っている。これは、僕が気持ちというプレゼントを彼女たちに贈った結果だと思っている」

「……なるほど」

「……まあ僕が言えた義理じゃないが、本当のプレゼントというものは形には出来ないものなのだよ。だから君もその人に、自分の気持ちを伝えてみるといい。そうすればその人もわかってくれるはずだからね」

「……すばらしいですね、私感動しました!!……わざわざありがとうございます!!」

「いや何…役に立ってくれたのなら何よりさ」

「とても参考になりました!! わざわざ引き止めてすみません、それでは失礼します!!」

「ああ、また会えたら会おう」

「はい!!」

その後、二人は仲良く街へと消えていった。

「…………ふん、マッドサイエンティストごとき人間の口からよくもまああのような言葉が出るものだ。笑いをこらえるのに必死だったな」

「旦那、捕らえなくてよかったのかい？ さっきの奴、指名手配のスカリエツティだろ？」

そんな事はとくにわかっている。ただなぜあのような犯罪者がこの辺りを彷徨っているのか興味があつたのだが…。

「隣にいた女…あれはナンバーズの二番目だったな…。もしあの場で何かあれば奴が通信で他の戦闘機人ガラクタを呼ぶ可能性があつたからな…今は泳がせておくでしょう」

「…なるほど、ね」

娘を思う気持ち？ 馬鹿馬鹿しい、貴様にはそのような権利なぞ存在しないと言うのに…。

お前を待っているのは地獄より苦しい、絶望だけだ。それまでの間、自慢の娘達を遊んでおくんだな…。

「…………アッシュ、帰るぞ。興が冷めてしまった…散歩はまた今度にするでしょう」

「りょーかい」

ジェイル・スカリエッティ…哀れな男だ。さきほどのお前には『無限の欲望』の欠片さえ見えなかったぞ？

それでは駄目だろう…貴様は犯罪者でなければいけない、俺の計画

にはそれが必要不可欠なのだからな。

「…………ふふ、六課に帰って、高町に『気持ち』のプレゼントでもあげに行くとするか」

気持ちの部分に多くの皮肉を込め、俺は六課へと戻っていった。

十三奏目（後書き）

伸二がハヤテから受けた「お話」についてはまた別の機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757o/>

魔法少女リリカルなのはstrikers ～魔王～

2011年10月7日18時07分発行